

親鸞聖人繪詞傳

一



皇和紀傳之有繪詞也
其來尚矣吉水繪詞
流祖傳繪亦載之身
而如其傳繪所載五三
遺漏不少是以我

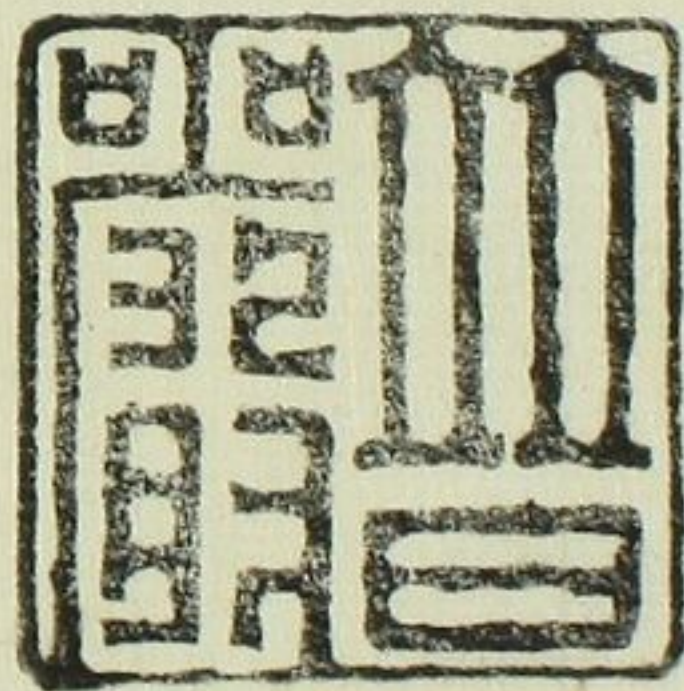
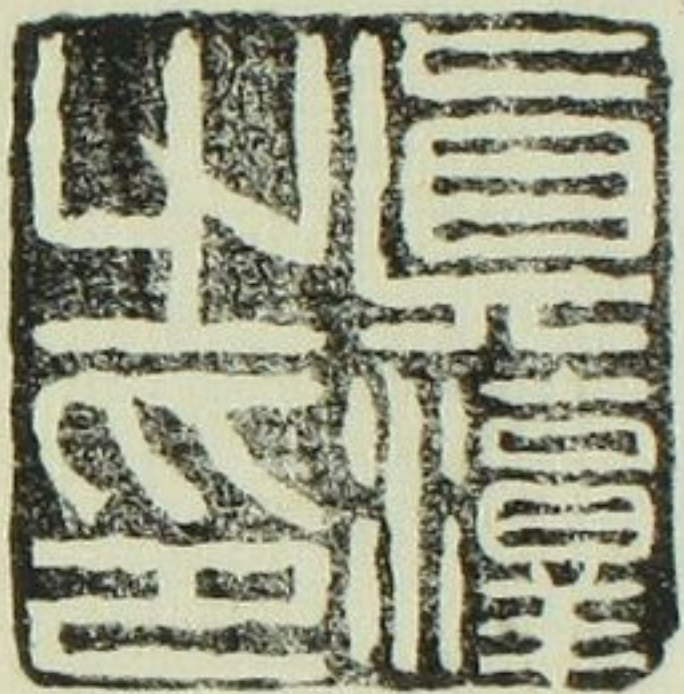


大法主輪下為使愚夫
愚婦普知流祖行化
之盛近命少僧都舜怒
法眼慧觀等本之紀傳
正者以編次其繪詞鳴

辱鴻慈之至誰不感
戴今茲庚申孟夏其書
功成余雖不類不堪歡
抃聊弁數言為之序
時

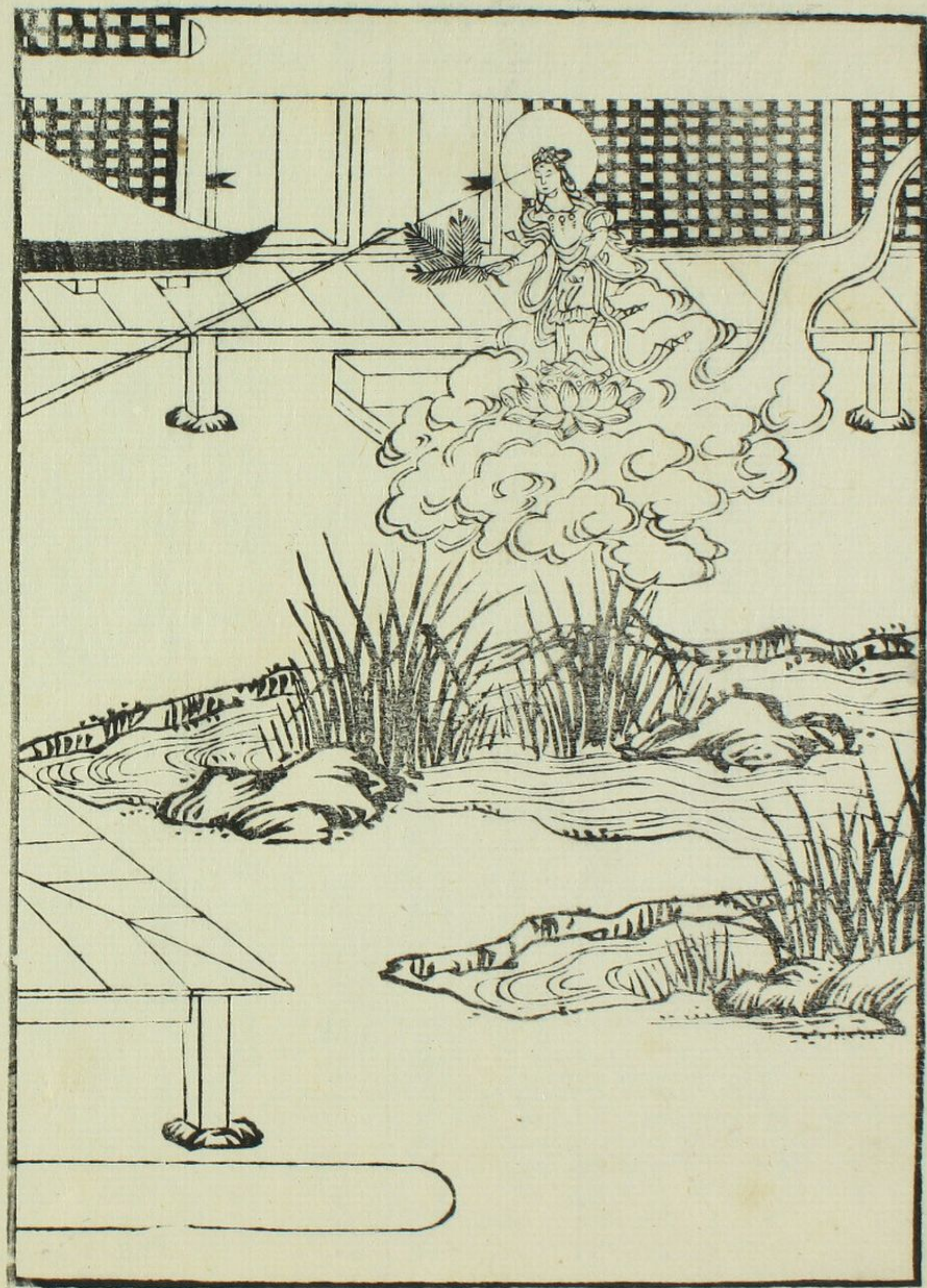
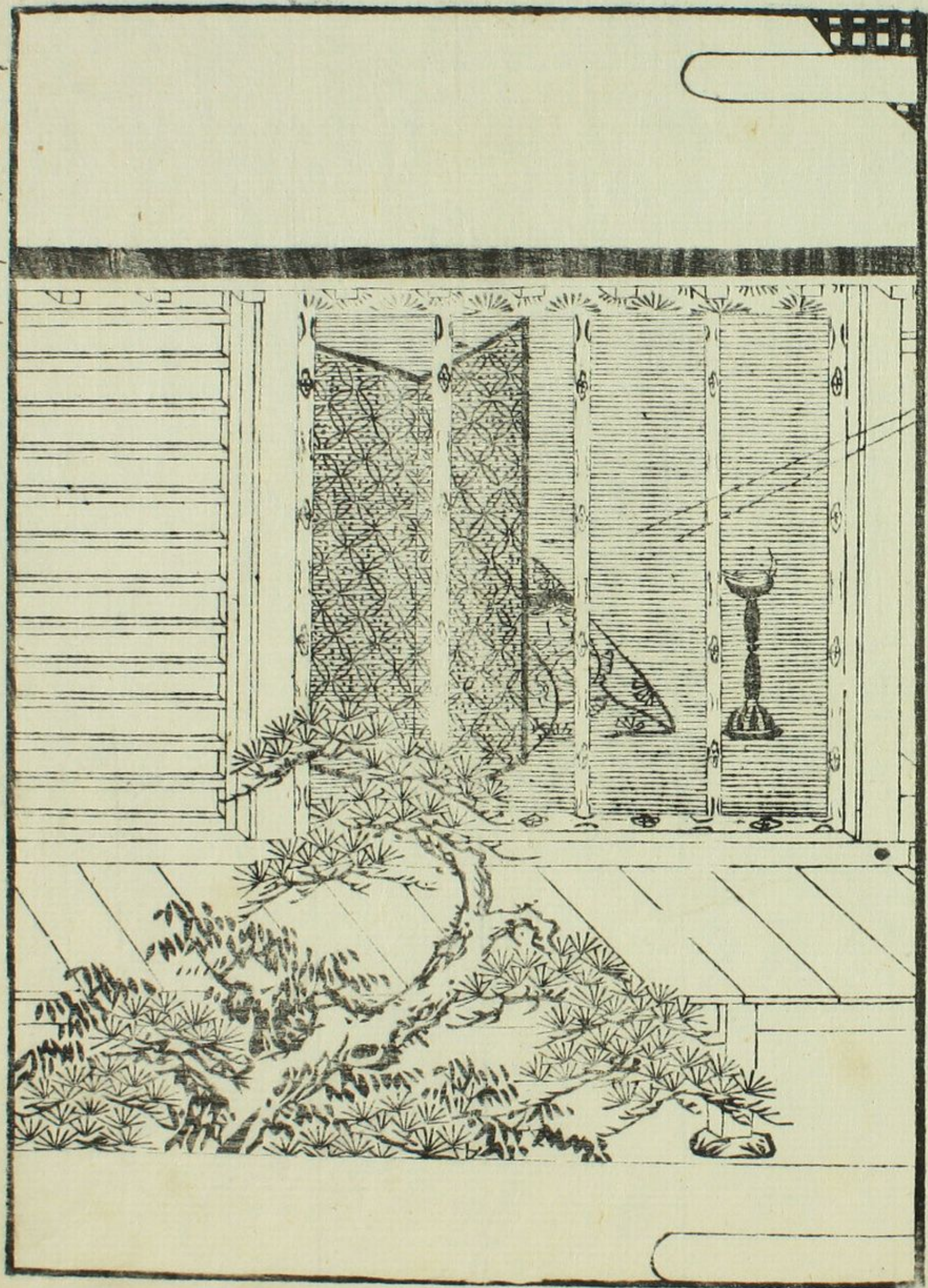
寛政十二年夏五月

權僧正真淳謹撰



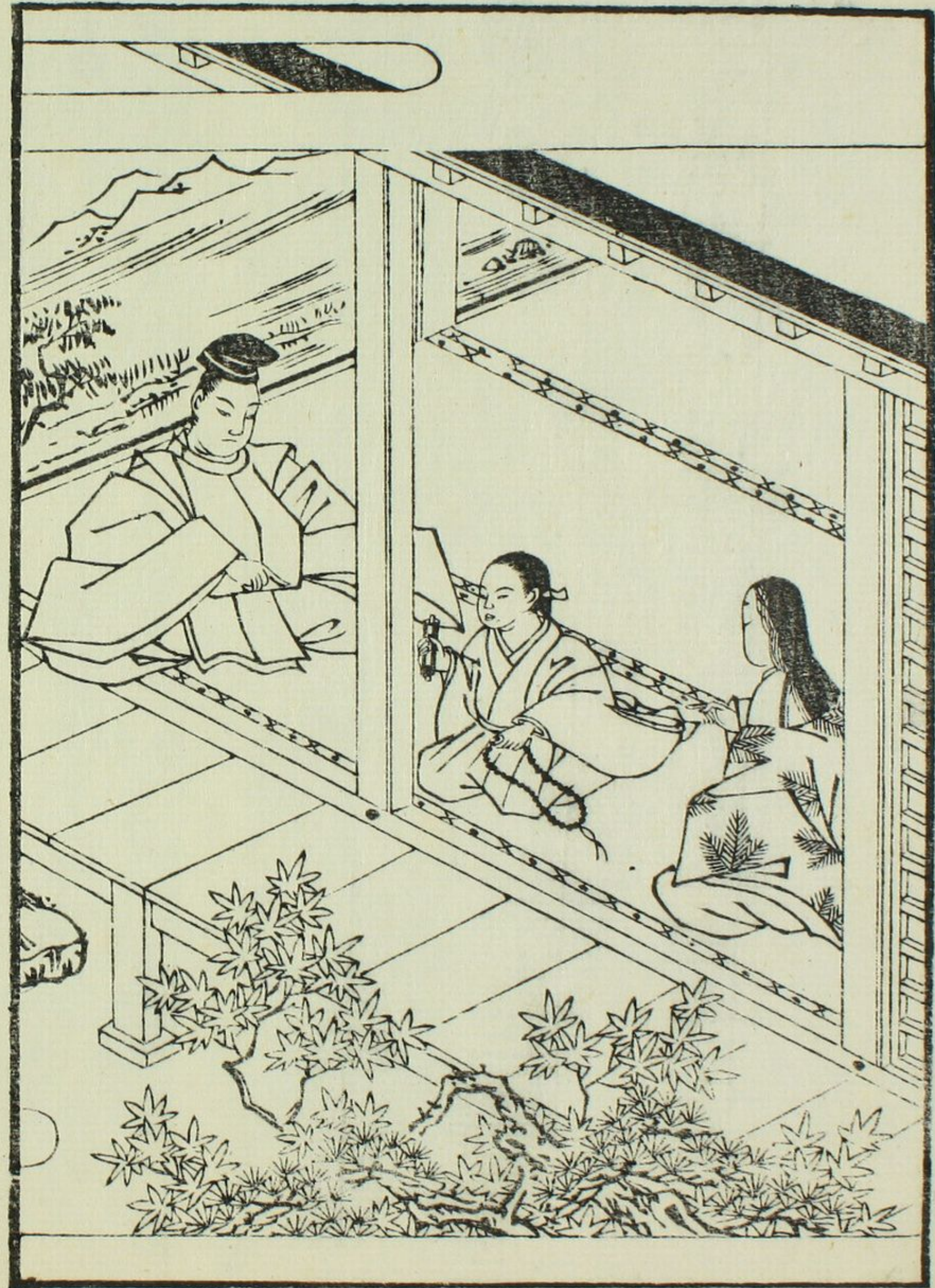
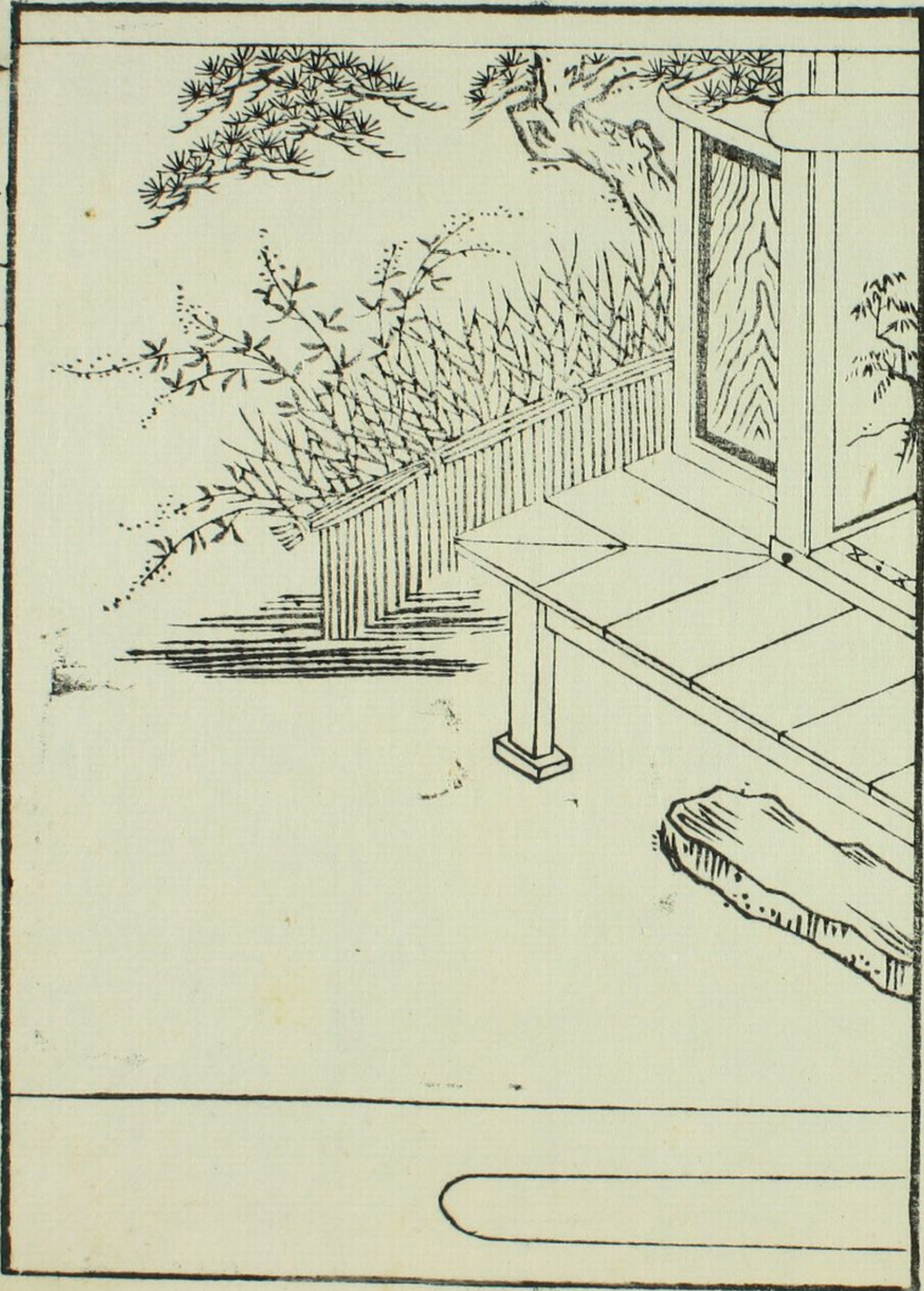
親鸞聖人繪詞傳卷一

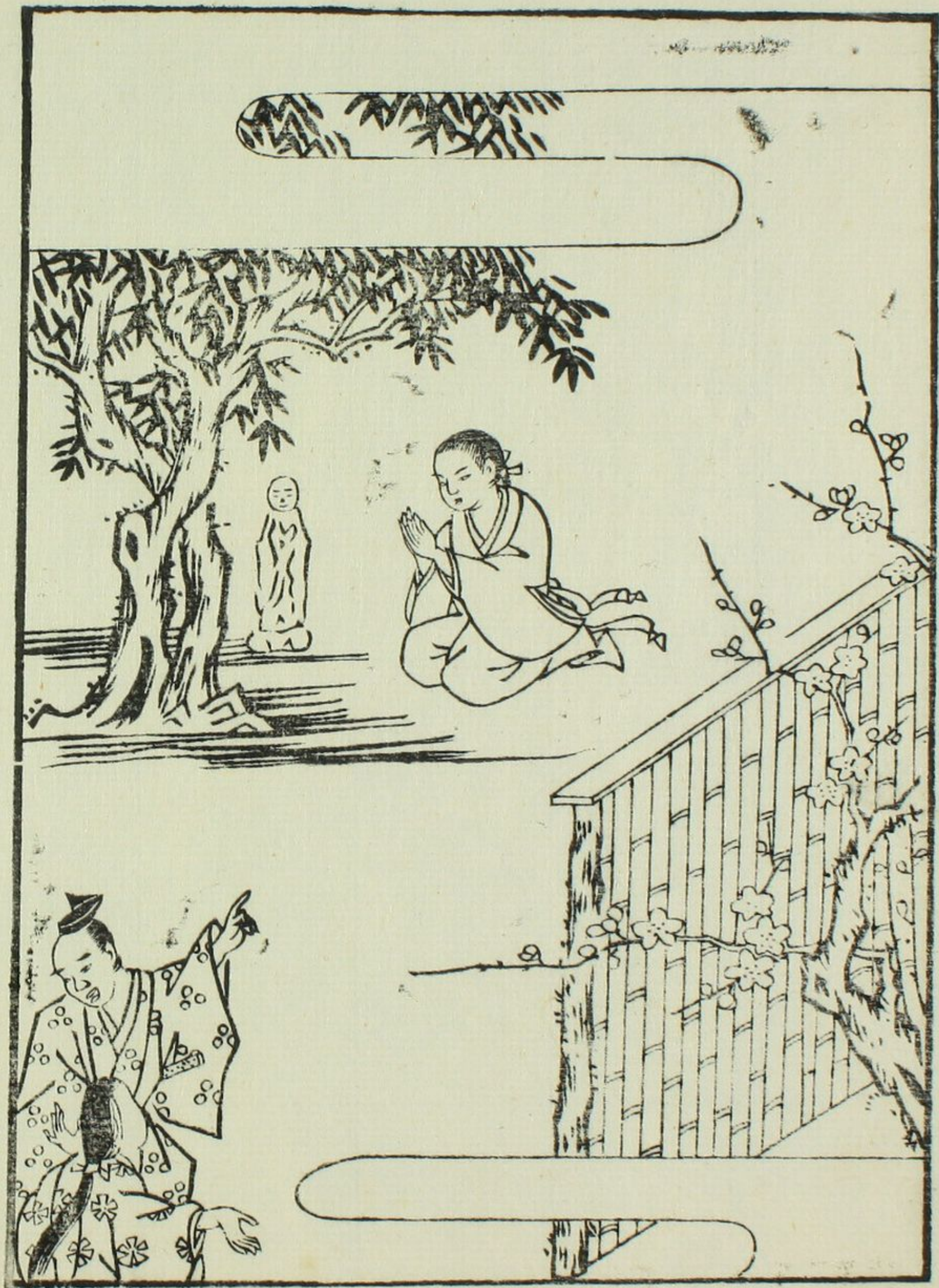
世もく下野國高田山専修寺の開山親鸞聖人
初は聖道の教法まらびて顯密乃真自法究め
後淨土の真門入て他力佛乘に宗義を相承
しけひ下野の一流と稱し末世濁乱の衆生
在家愚痴の輩はわすれく化益のよ其教化
げあ東瀛よりかゝる中比京師小び今ハ一
天の妙なる誠は性生淨土の先達濁世衆生
の明師なり遠く至系譜と尋まら天神七代
乃けの天御中尊より四十六代の遠孫より



聖年癸巳四月朔日十月廿七誕生す後
 歩如來滅後二千一百廿二年又わさまりより
 ら夏の昔にすせて十八公磨とせ名にけり
 まひる當年十一月よりく起居歩り
 りふ人と奇異の形ひは形きり
 二歳の秋乃半小沖父有靴如臣の膝乃とた
 まし申す六字の名号は少子一かよとせ二聲
 音夢多くわざやうなる事壯人のおく
 是よりくはははのこまり又うらまはれ戲
 うも経巻紙取ておし式を念珠ととそわそ

び佛号は唱あつとせすしゆせり
 四歳の沖時二月十五日酉刻十八公磨家
 内み見えたまはざりたれはと下驚こころ
 きてくよひとせ尋求くるに庭の樹
 下にすしゆそと紙練て佛像と違下と
 息あにひいて合掌し禮拜恭敬するよ
 事半時げりなり

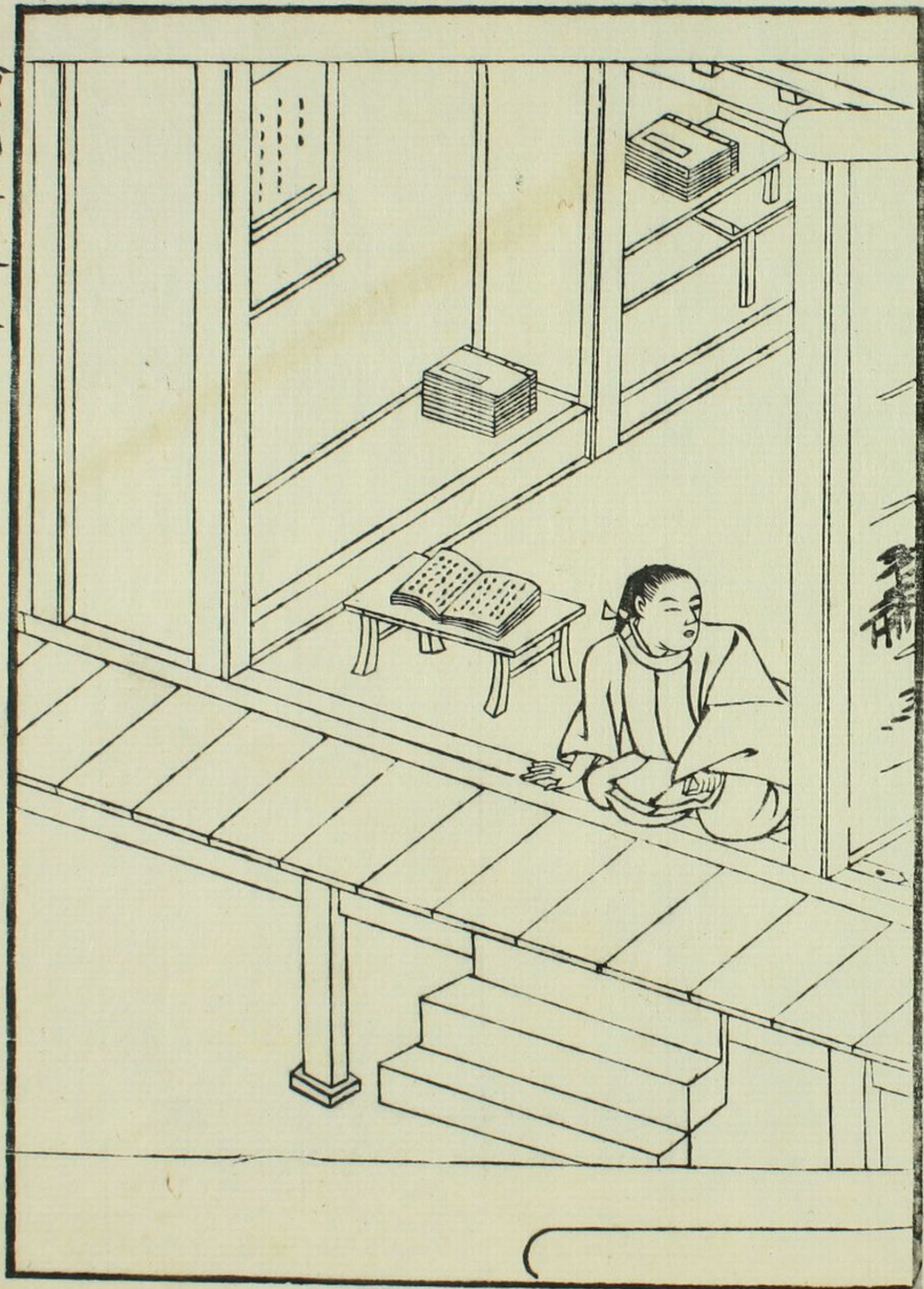




同年六月十八日 泚父有靴紐長年去志多
 々此泚父才淺磨之長伯父三位若狭
 守範網口の養子と形りなりぬ靴紐網
 と後白川上皇の近臣とて博學多才の
 歌人なり
 五歳の時より伯父從四位宗業朝臣と師と
 して泚父を養ひけりぬなり



七家の春乾綱御の家よわ奇乃會河り人
 の君みりて秋道の真旨は乾綱に教諭
 せよとるは十八乙磨之剛あひてまは
 ちしむかから乾綱のよあはひて
 の奇書とみせんト秋よもくみ
 たまひり



八家の出より伯父三匠の口又と南家の儒
生日野氏初忠經よ志こぼして孝経論読未
沃よまたすひ弘く六経よよりて聚華映雪
のはじめ忘たすも久し文選の書にむる
すや著く習熟志こゆり

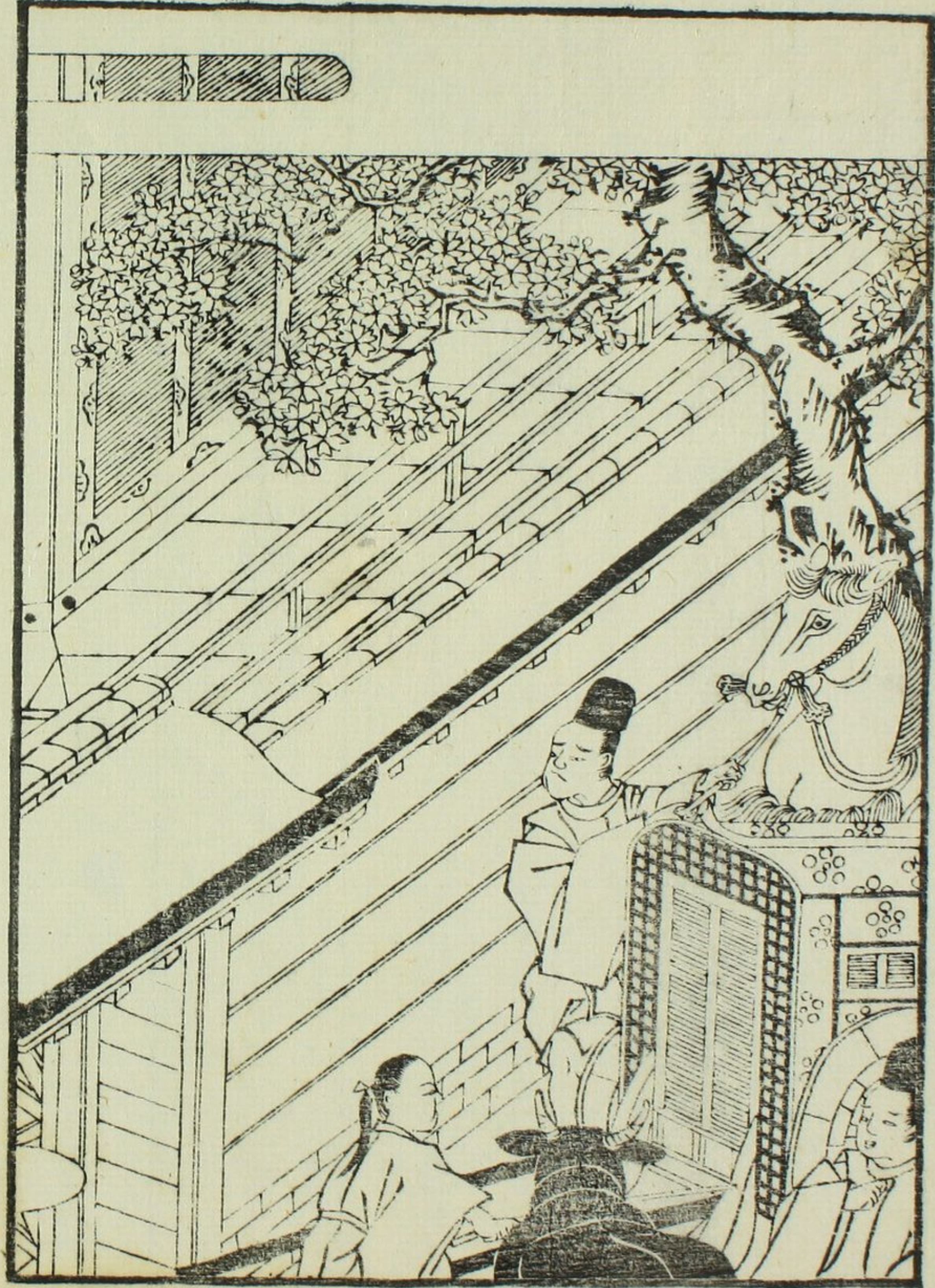
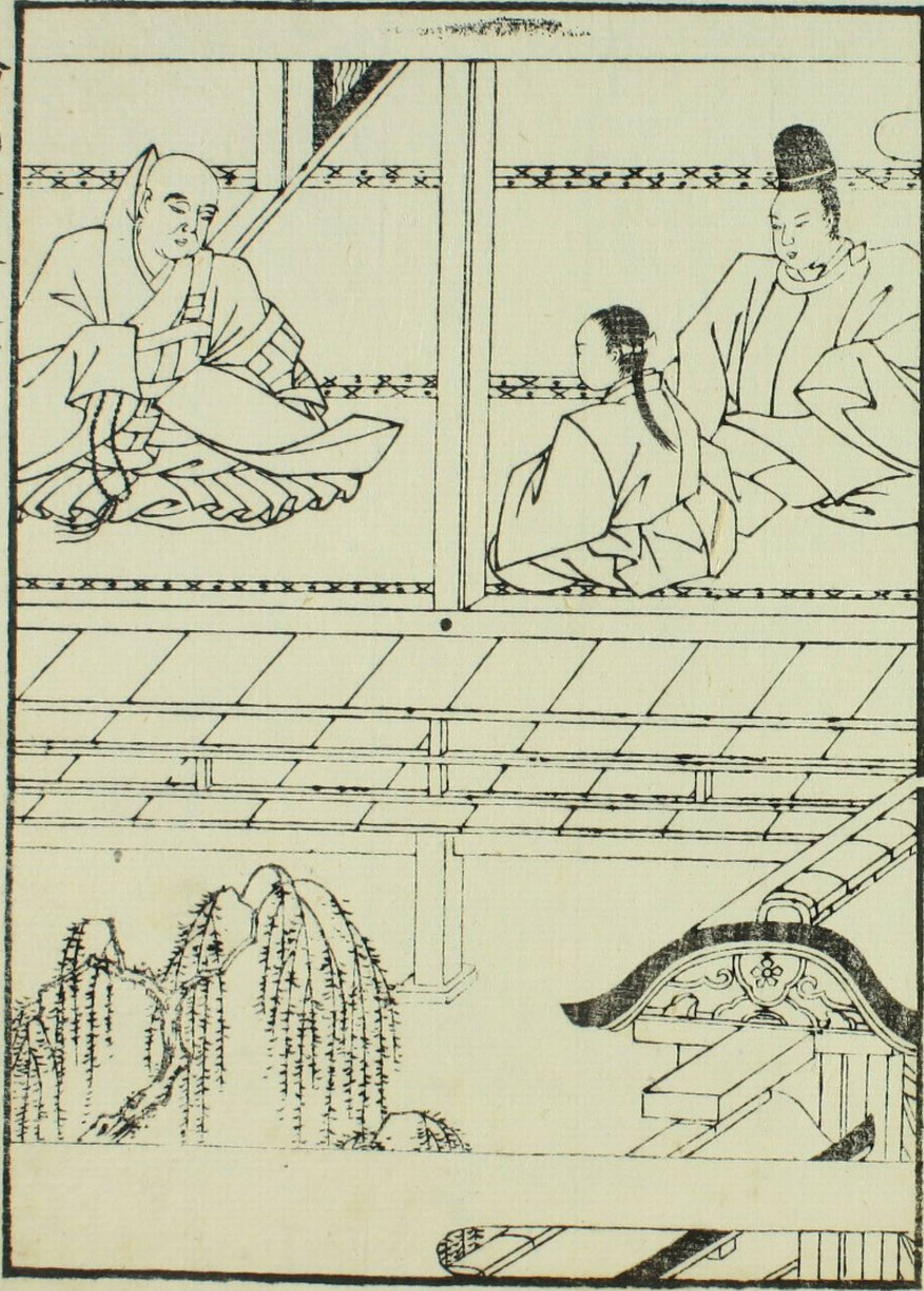
おがどき年五月五日沖母を奉之女とい
ふ風の心地とて卦多ひしは終にそく世
沃去より十八磨沖足才深りよみ悲
多ひて沖身も疲およりて入えたまひ
多きバ乾綱の宗業の長り也極よいよめ

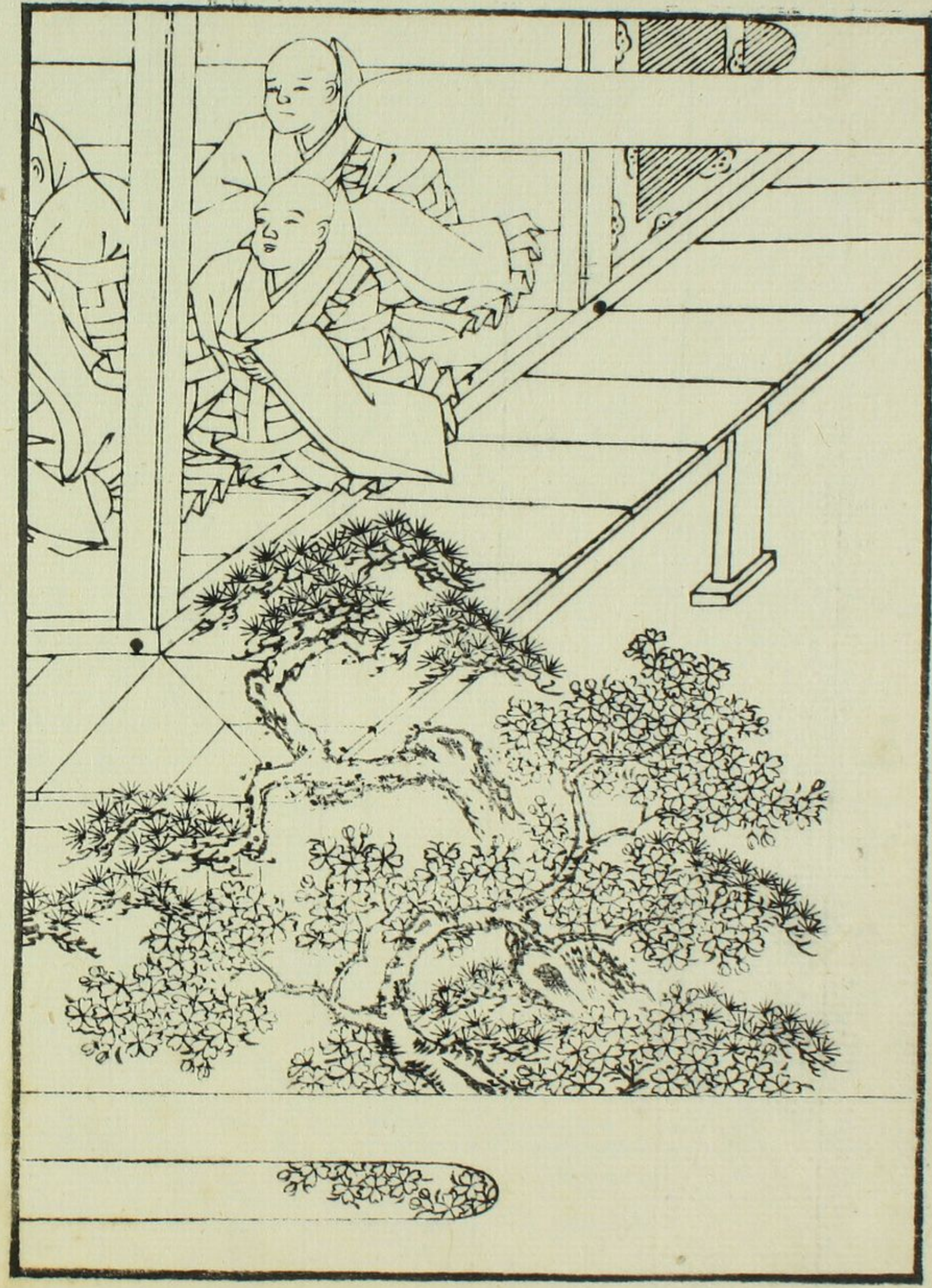
なぐさ久法華経の中乃に要心沃を
授けらひて是も母への善提と昂こ
そ孝養の才一かれ何ぞ世傷のせん沈
く道もめき寂沃取やそくし中沖心
そくさくをたまひてそれより昼夜沃
よりん要心沃讀誦一の由之ん全部やそり
てその末ぬ八社もにせりくそ
たぬりし時らしてお家の沖らど
志きりやそく心し事りくそま
しん



九歳の春伯父三任範綱のと云はり小出家の生
 沃と子とは乾徳の也も十八の磨いままと知推小
 ましゆせば今の志神もありいども
 壯威よありても一意深らば其身とわやまる
 の一形ば父母の名も辱しめむらし下
 づいまも又一終く亦父有範範長卒
 之のみぎらり入胎の奇端延生と後のわりも
 沃子の久くしらひて行末のお家とけんごき
 能遺命したまふ事もいり又一性質常人
 小延ゆる亦もわきばけひよ許差らて三月

十五日相付ひて浪陽粟田は青蓮院の門
 室に入りたまひて慈園和尚は拜謁わりて車の
 一具具を述ぶるもいはれし遠く得たりも
 長く神瓶をゆる事は許すべしのたまはり
 亦も感心をいはしけりといふのごき志を
 奉實は家縁をなん而ら後をなんたま化せ
 導の道をんの日すたに刺深かうめんのこ
 まのいふ時十八磨曰生死事大無常迅速
 かり形くら今日難深せりあらまし取らんべ
 一首のわきとも詠吟をますいらる





ほつりてしん心乃何と橋東と嵐の吹ぬあふ
和尚ちよ驚歎しちひもふららた場と
印もて中れまゝに出家せしめあふ戒師と
慈園わがなり沖斐とわ柱智房阿闍梨
性範せお海とさくらら沖名とも政
て法名の花宴彼名の女納まゝいふ
日よき奉獻まよのがりて登壇受戒し
たふふ
十葉の春叡山東塔無動寺の大衆院入て四
教義と淡くめあふ句讀の師ハ柱小僧神

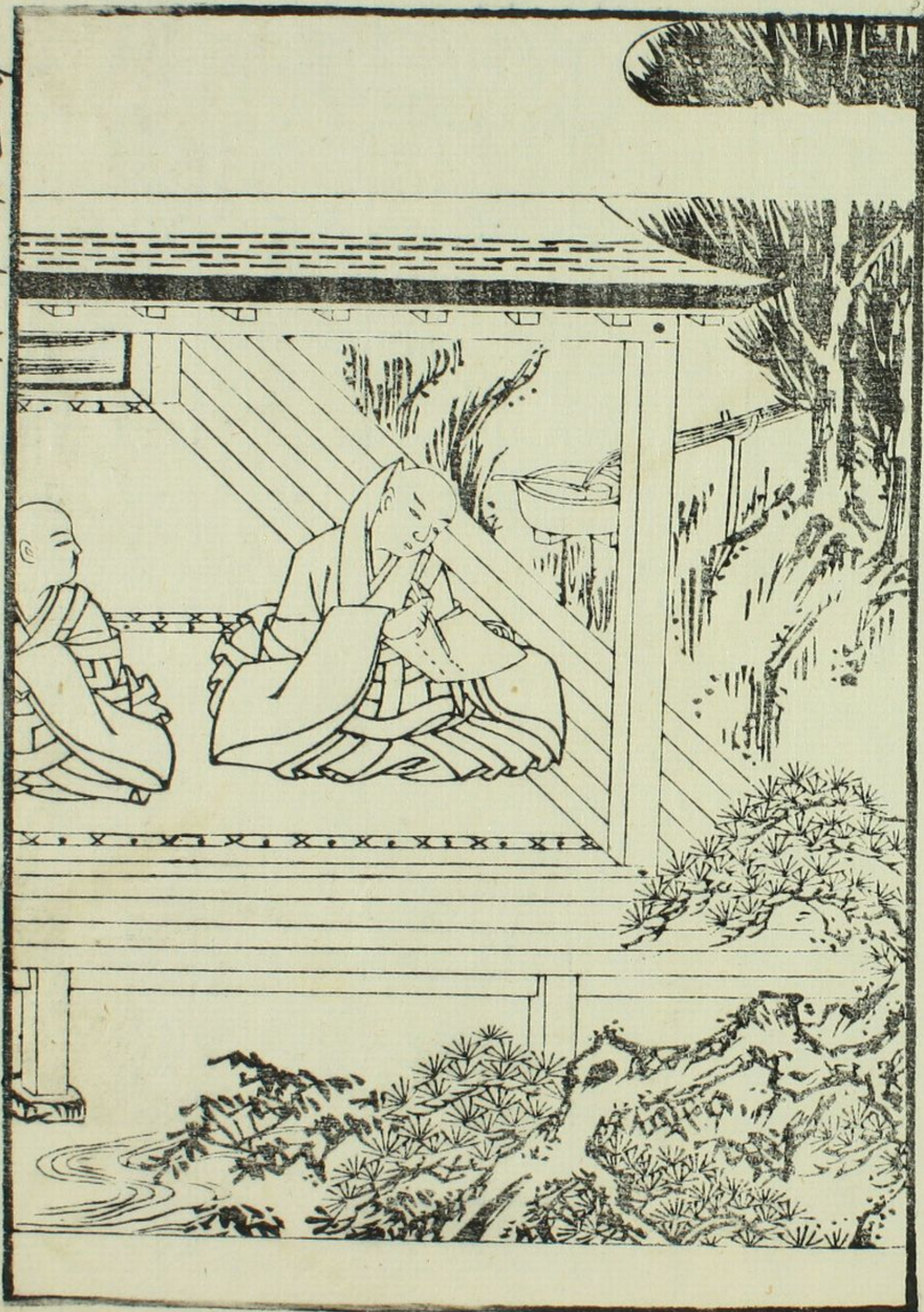
竹林房静教なりあつらり教ヶ奉の間南江小
嶺の明師と福く愛く大小名興苑とほく弘く
顕密の深義とまはれたまひたる
十九葉七月中旬の比わ州法隆寺一系詣の望を
師のわ尚よりあひしはたなり許さん小
たり及ぐて書文範綱より附重とる西金房
侍従と石具してわ州よりおまひとたきい費運
僧都の坊と逗留ましく因明を秘奥とまきび
くゆふと幸比序りりて九月十日あまりに
河内國磯長の里聖徳太子の沖庭一系詣し

たすひ十三日より十六日まで三日漸く花より
あつた十四日夜丑時爰少くも現く
きれわり聖徳太子沖夜日よりみか
石のくまに印き光明かくるく
屋のうらに照し列よ三満月ま
令赤の相現トきて曰

我三尊化塵沙界
諦聽々々我教令
命終速入清浄土

日域大乘相應地
汝命根應十餘歳
善信善信真菩薩

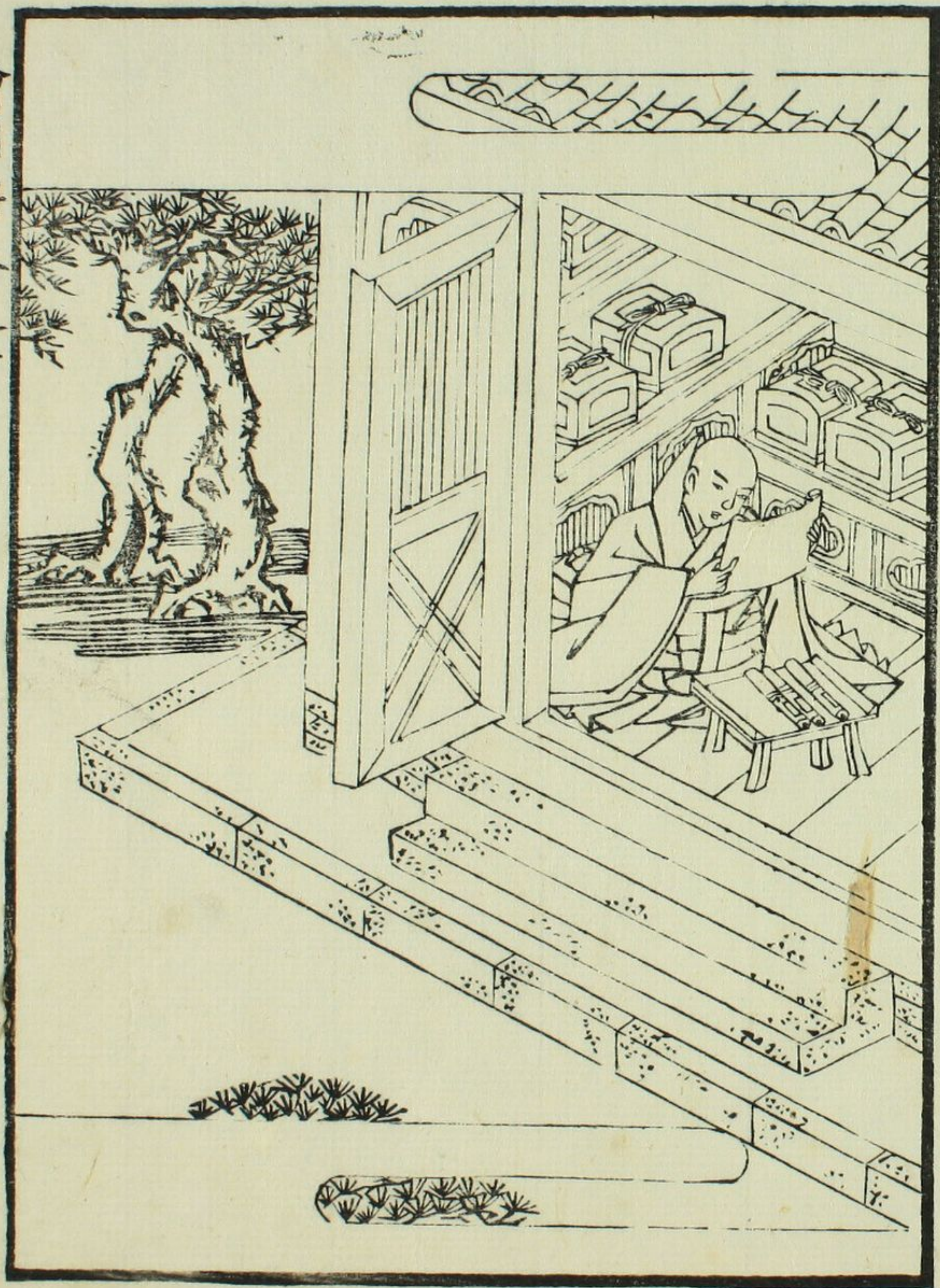
の若命と得るもも沙く
くむらべわくば十五日午時のけりわ小け
の文に書記しあんと中依の
そんた見まらげり形り



二十歳の仲春より南都東大寺に招提
 寺に移りて律と俱舎の真義を聞け
 小因小般若の理趣を著し卷に併けし書
 写して春日の神社小奉納しあり
 二十一年正月下旬より二月までありて
 横川飯室の妙學坊小因より一心三觀
 乃旨に思惟し一ゆとん其定中小惠心僧
 都來つて一ゆとん曰汝ゆとん定は生す
 愈一は土の濁息少く退縁も唯淨土の
 業も念佛と奉とんはめて欣求も一



このまゝと感見し迄に
 正二條より二三ヶ年の間ハ所學問の如く
 又學友のゐる小止親善に講談しあひまじ
 南都興福寺の經苑に入て一切經法を
 見るに又ある夜華嚴經と續誦しあひま
 誰ともなく微妙の音聲を助るすの夢
 と夢の人見たりますしく經の蘊真と
 らめたまふに



在立卷二月の比師の和尙乃命以受て小止観と
往生要集氏講ざりた和尙雜問と設て其
解會と試ありと範宴一と對答のれと青
天白日乃如し今未談の妙亦泉の涌る
どくなんば和尙たよ收めいとふら奏聞し
あひて小信都よ移任せしめ聖光院の門師と
移しと色乞の聖光院とよ青蓮院兼帯
の門室なんばつつけくひたまふと也
建久九年戊午河く在六卷初云の以叡山へ
登たまふ折しも赤山明神の寶前よ誦め法施

と河志河く不急涌して居の以時瑞籬の法よ
と河やしげなる女性一人來りたまふといけたり
柳妻のふ夜よ移りぬきの二重なる法亦折き
ていつは皮大肉よ極むむ人とも人えするがうはあく
範宴の所例近くよりそ河僧にいげくより何方
へゆりせあり人どや同くも河伏小わり多相換
侍従こそハ事り山へ登るるそふとけり女性乃
云妻も年来比叡山へ急信乃志あり侍ら
今日しと思立てん也初ての跡も是ハ案内も
志り侍ら一樹の法の面やりも多生の縁

しやむし事もむきき今日の中情いごる連
てたきしりひや志りくくまきり飛雲も
典ふあく女性ふまに知あぬも理り花杵が
比叡山の金排園頼の著るく出親三密乃谷
うくしと五の障あり月八入事法得あさもそき
法華経も女人の垢穢中して佛法の意よ能く
況もそりさたが傳お大師結界の地と定めあふ
浦山なも登る花かき詠が歌もあらしめこ
まあん叶ぬ事ぬ室と只世りかつりあて
あしべ女性おあふぶとみく扱かりさ事と

之はまのうね傳お女の智志何ぞ一切衆生悉
有佛性せん經文と見たすへちや作男女人畜
やもぶのびふてあふの山は畜類よあまて女
たるものい棲ざらや園頼の教よ堅く女人は
深きぬの美の負頼よ非ぶ一十界十如乃
止親も心り男もに限となむ十界皆成の
成むべの法華の中も女人非慈くは從如
が龍女の成佛の許れり胎元四曼の中
中も天女は婦よとやなく三世の佛も四放
乃弟子あはあそくさるかぎり結界の山形ふ

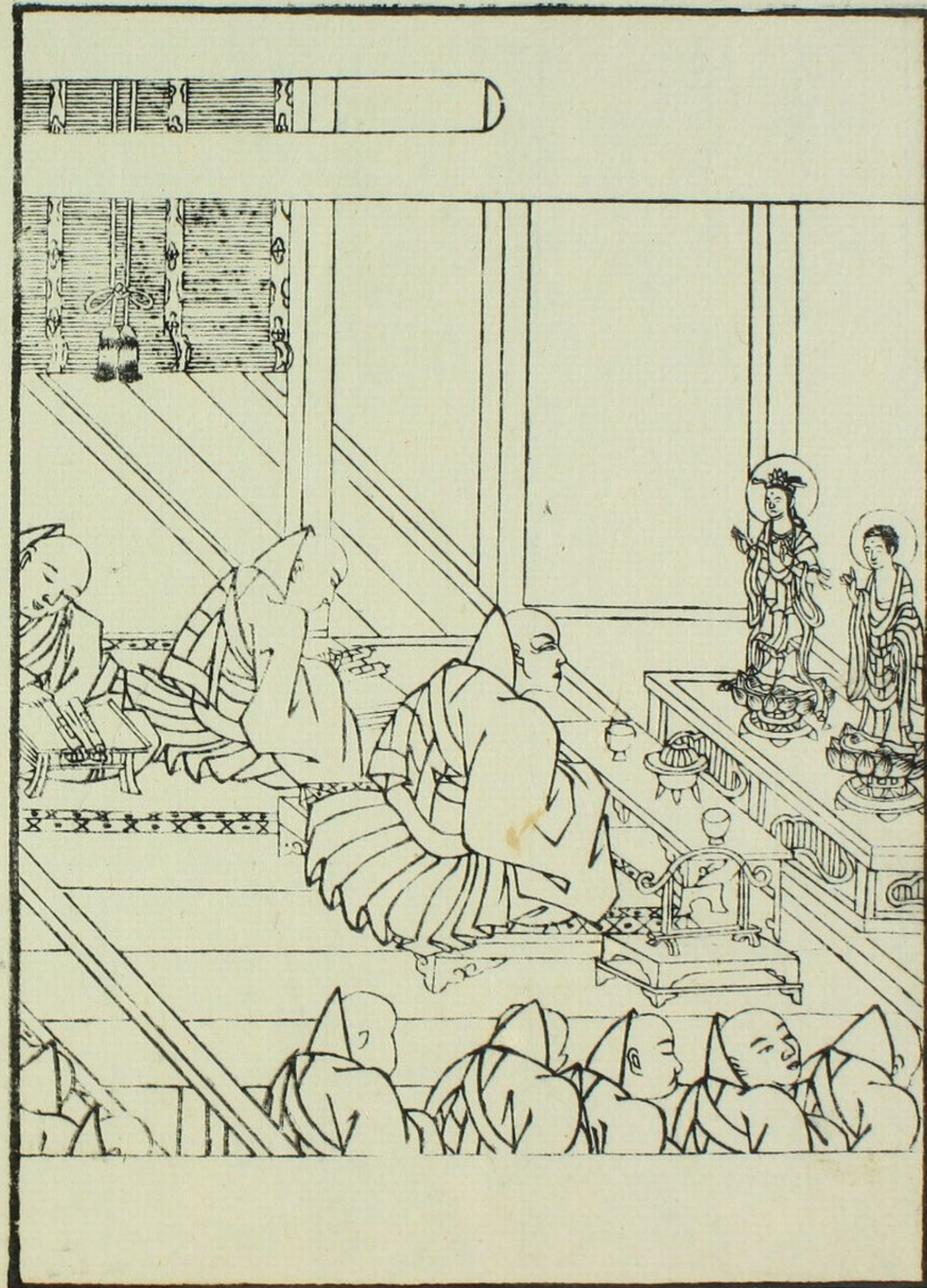
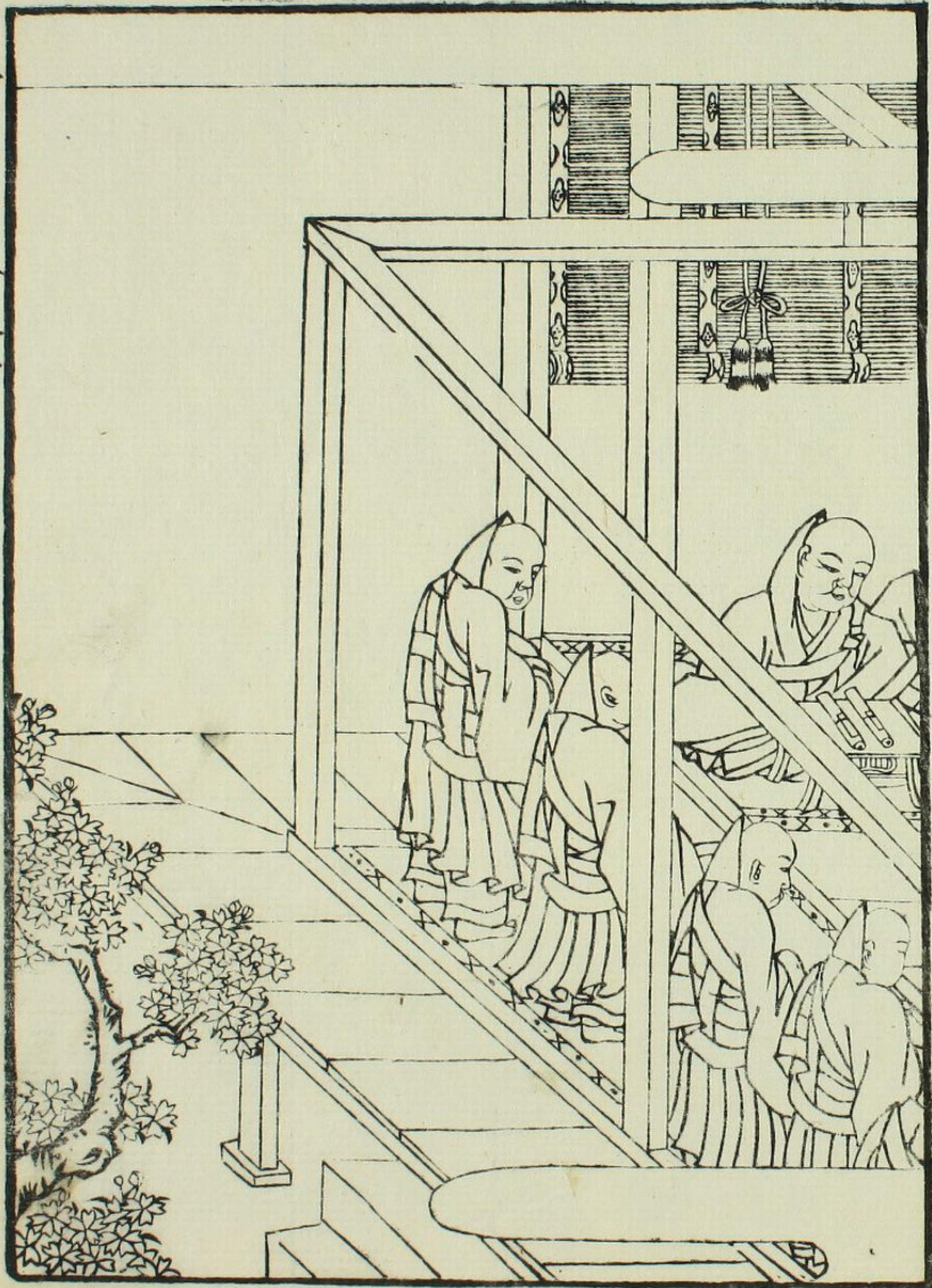
強て登るき中もわんまよせり形は知識と
尋て捧んとて所のそとるおろり今やうは
是は河傍小進下とて神り白緒と色
るおはあけの玉目此火取の玉り夫
一天四海の中日輝りるるるるる又土
石り低く酒きまのり天目の火起り
下て燈炬とる車形酒き土石の玉らるる
るそ園夜は照入實と成り色佛法の言根
乃水もまも岩たのく徳も何の徳用り何ん低
く陋と岩た下てるそ若機と洞と功はあんと

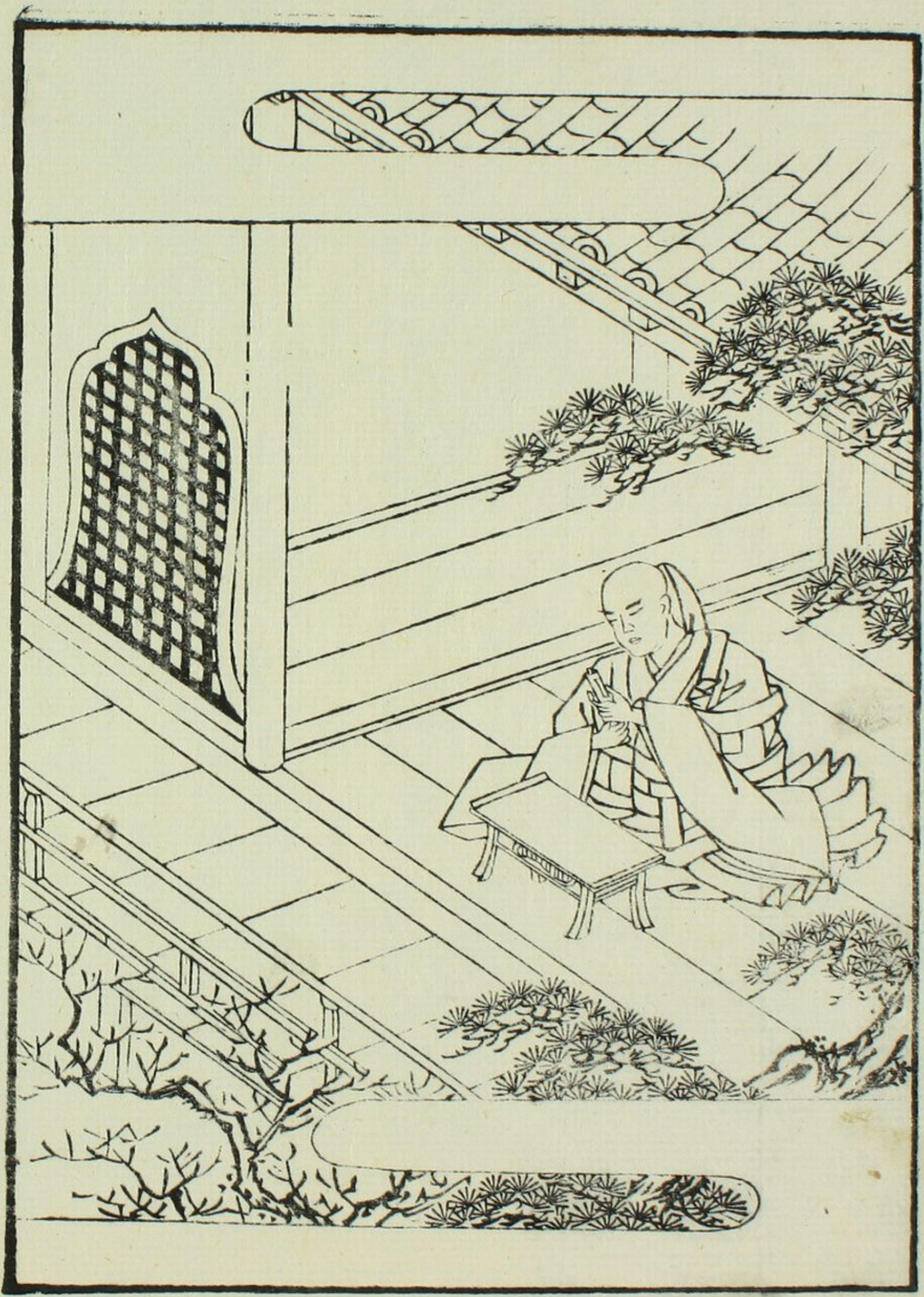
河僧の末代の智人形はたればは理小達ひた
るるる日と相のさるの理今ハ知り今と千
日の後には必是く何とる車の作りんとて玉と
は河傍より重て本法よまかくてうせまぬ其
後九菜の色教下の息女と配偶くふとそ那の
河名氏玉目とてはるはきて是れは天日の火
張明玉より一切の生乃速園と畢り其
三従の女まであしぐり身せよの教形
了也始く懐たまふかの玉と結く化女を
功徳天女とてとるわりとむ



同じき春深色芳質の本像二軀と彫刻して
聖光院に於て彦王慈園和尚に首として
天台乃ち僧百廿八清一七日の間法華の
八講と称したまふに初日八國安泰乃
御祈禱なり中の二日ハ大小の師恩報謝未
の二日ハ先考先妣をびよ養父養母の現當
乃福又擬せ給ふなり其状をみて西塔の一
切経藏と建之しかのありと稱して経藏
のありとすなり
古七条二月下旬叡山の東に山王の神社あり

御系統なりと御系問のありしり志ありた
文殊の志を採り
同奉公の末より安住後の聖受法中法
にて玄義文句の真義と同りし聖受ハ初年
とぞとすなり人なりとあり東大寺の慈
観得業氏法にて空有二宗の深意とす
びよあり
同じき年の色折州天皇寺小系法よりを子
其等の後髪経法ありしあり





其の春の春脚の和尙乾宴法清とて三大劫の會の
 の旨法述の止観の眞義法重とて法同いたすま
 乾宴慈河の法法妙ひ一とこれと善のそと速
 形事疾風のち身法拂ふお如きとわ尚
 大よ感歎して汝の善よまが山の神説也とやあま
 里又友の以華嚴と講せられたまふは法界の
 後よりて今未開の妙法法はまの法入く
 たな殊養して法その良辨法とてやまふ
 ねふとまの九月は慈園和尙より和奇の淨使
 とて禁裡へありたすまの事わり折りの起り反

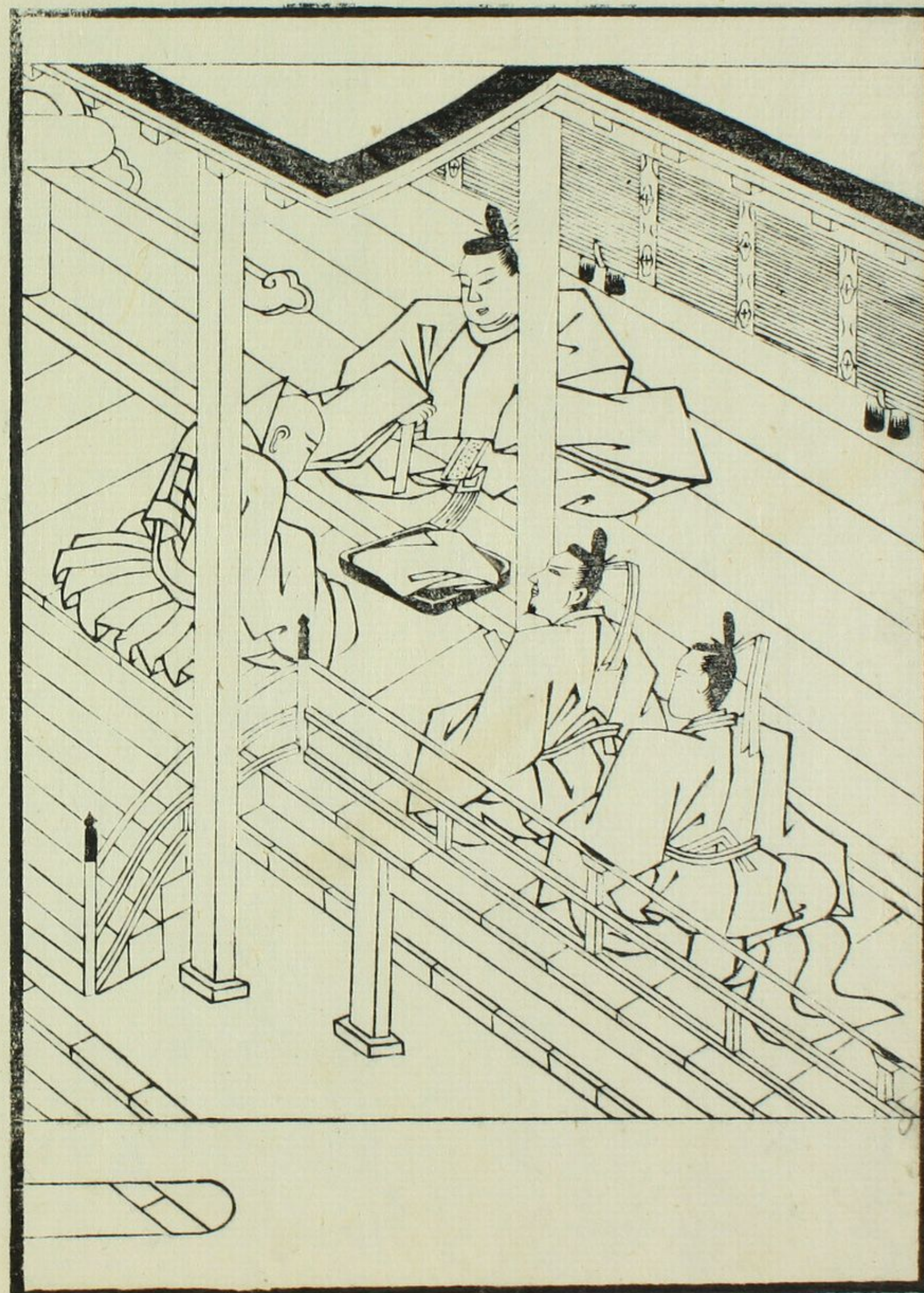
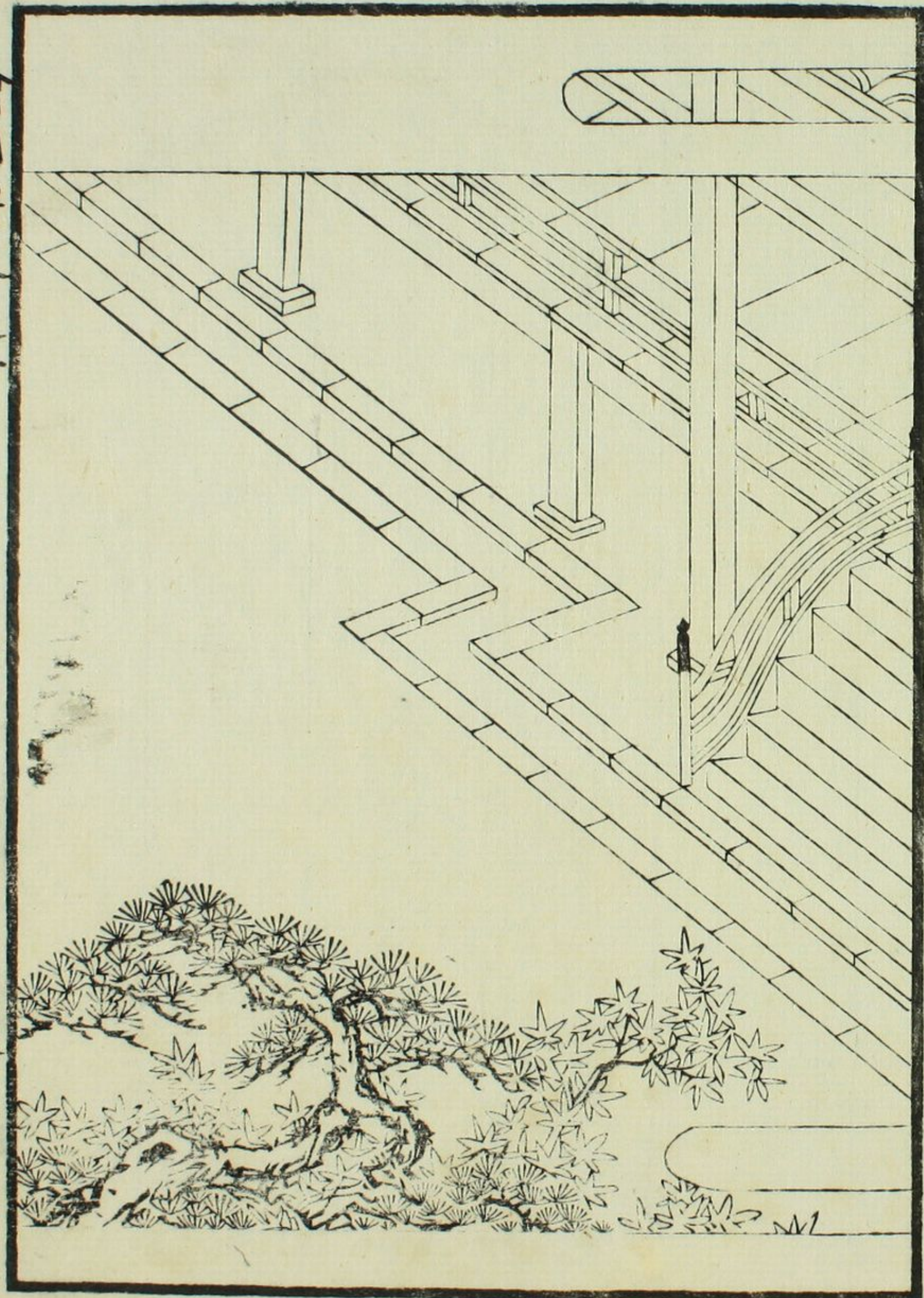
君ゆり小禁裏より色の頃とトよき人令歌と
續てふれりるる時慈雲和尚の歌よ
家老の松爪時白の深き糸てま高が原の風を
如法依りて天後ふそが可いん思ふゆきなる奇
か一時の秀逸やれんばそ林む人へ詳じて云かく
斗の名奇の意さる牙やそでいりひもふうん
一生不犯の疾をぬんどの牙やそでいりひもふうん
中さねるる時ふく金儀ありてまがのうすも信儀
の知まじき事辰題して名奇辰よません
ししてまて齋厨名と云題辰下る時ふ

雪物といふ牙やそでいりひもふうん
と續てとらんりるる時下名孝辰拍くまよ辰の
とよむるは形の形とそ大雅とそ是却て和方の良名
とゆめかよは時の沖使の傍正一生の浮沈形れとそ
聖光院乃乾宴辰系下せなす一乾宴も又教師
生涯の安否形と進て系内ありたりとより世歌の
使いたせと勅同のりも大進有乾子の乾宴少納
云く養をそそいそま父三位も命り師の傍正もますの
まをそまふとそ乾宴もませり人歌はるまらるす
師の傍正たまたの母と詠じれば乾宴をみ

しりのお氏 續庵 一とて 仲の題とたまりの
靴宴いりり案どたまひて

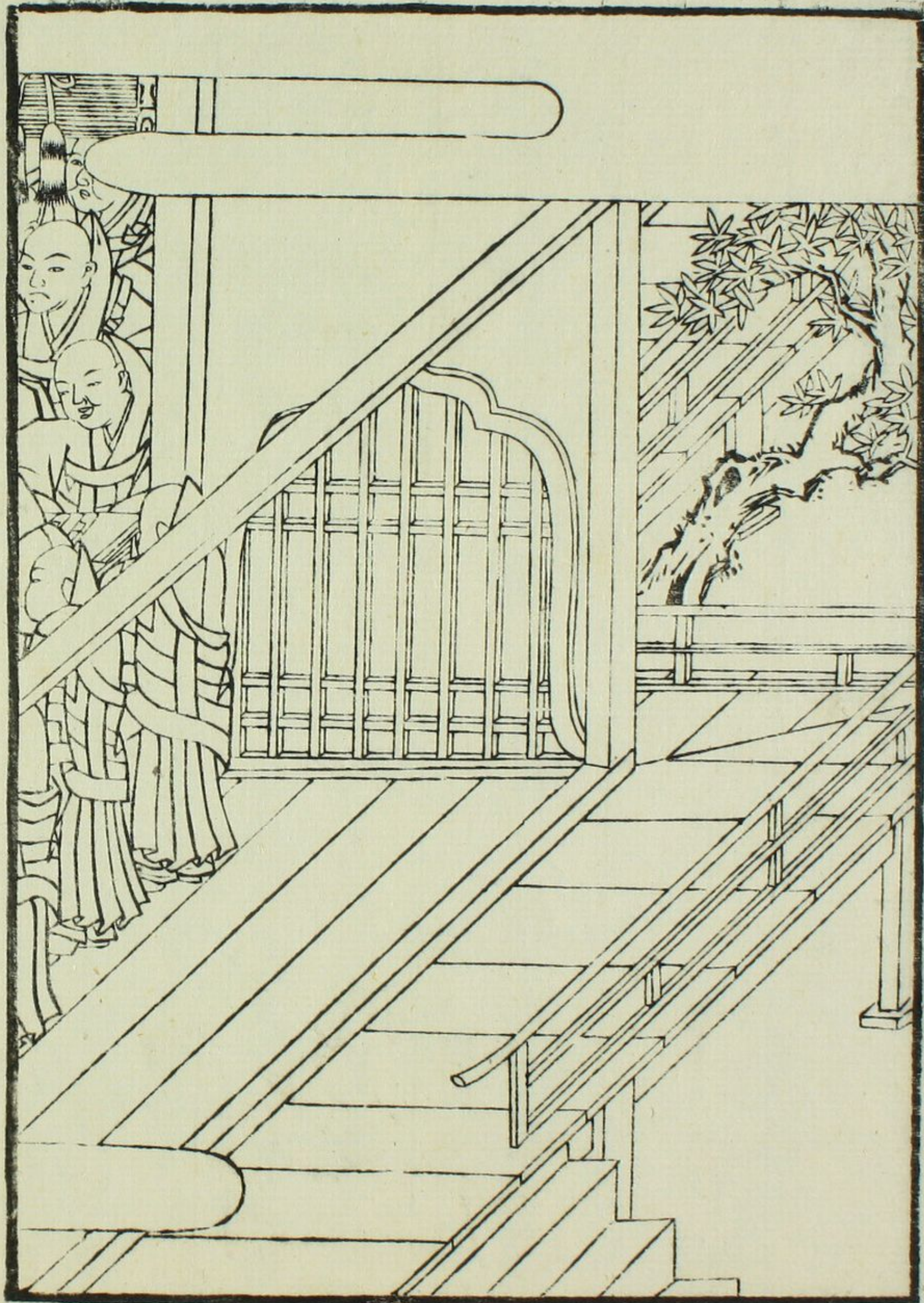
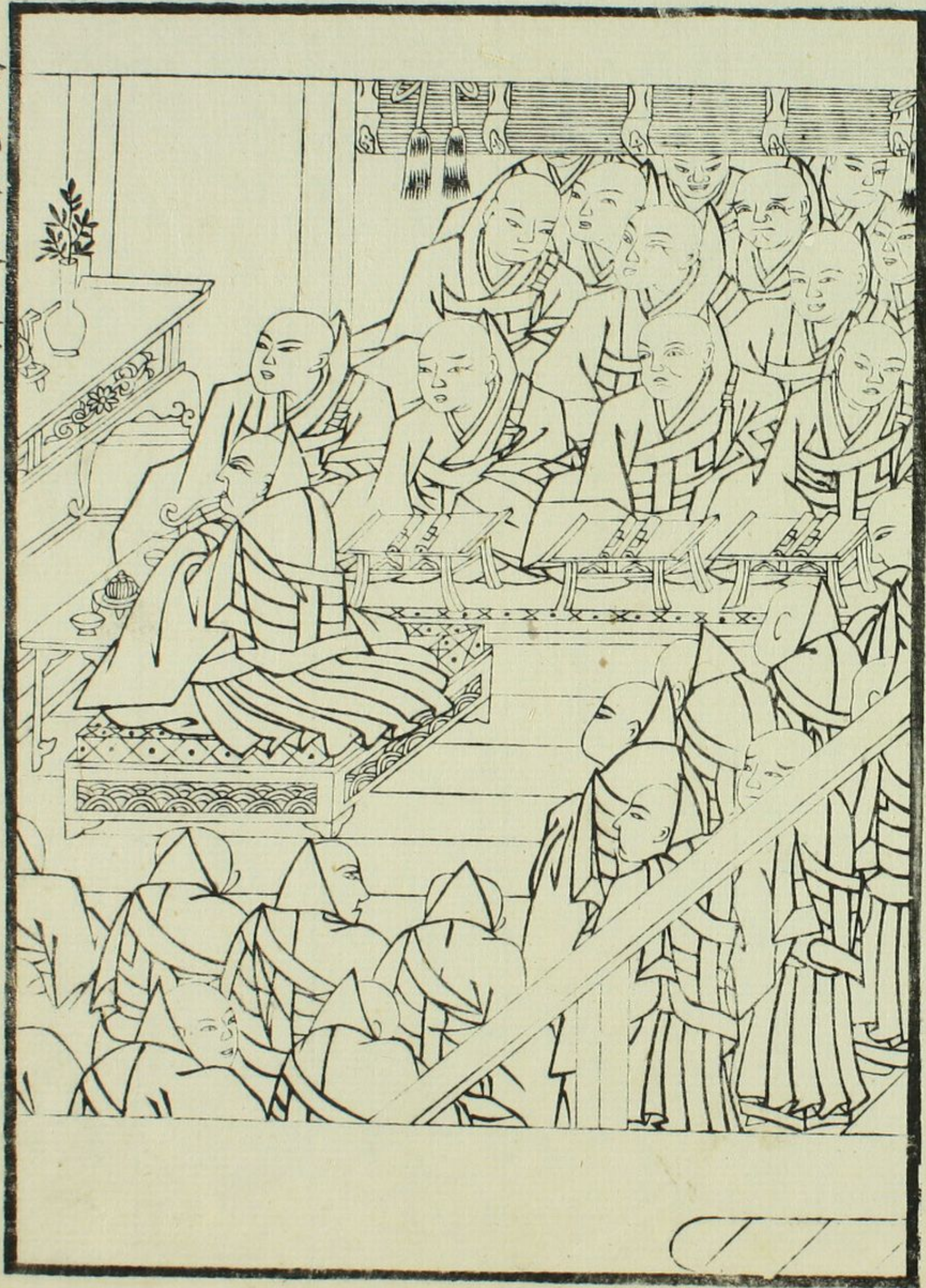
美鷹此みしりのお氏 吹きておのき 掛おの目吉
と讀ておてまうりなまひるまはと一人より書
この公口らおとてささくら三位がおふ子慈園の
才子うねとちよ株屋せしるまの所感の條ふ
松皮色の山袖 派場り侍従三位時春 御服
派あす小捧て靴宴ふかひあられり
靴宴退出りて及とつと只なるる夜のお色
仕損むるまわぶ仰靴宴父の名派も下す

我天名の門跡は派後も紫田うまるとふらとて
世このおとすまうり心師の傍心も教との交の
急小とおの思難もまあふと見ぞ道世の因縁
なまわと頻よ思道の志やうと水あまらる加納一
心三親の公乃水派凝したまふとと六歳藤葉
の派よまらるん初き三空瑜伽の胸乃月派を命た
まへども至明煩悩の雲わくく覆わり世乃元夫常
漫の氣生をまのあまの修行の境んやあまとい
う形る明師も倅く元夫速入の法門派はえわ
ておらく元生派漸たせまやと廣大の御意慈心



多む時形くせしむりくさる
 月どき九月中旬山門の耆宿八十餘人派拓請
 て一七日止親のち三昧法修しの人導師ハ慈園和
 者聲の心下は安居院法平聖是竹林房靜巖僧
 却等也先考先妣の菩提并ふ本受母現當の福
 田乃おなり且はまことをもつて一七止親のち三昧法修しの人導師ハ慈園和
 師身朋友の中修波も是止と也る多うや七日後とて
 翌日ハ優秋の清會ありける
 日月十七日正金房の庭と中使とて頼林法隆寺
 是運信の方新き強加案一夜法修する月

正日仁和寺乃慶る法橋の汗一贊多雁信衣
 形び又標帽玉灰湯のい清文ありと又此中と形
 隠遁の清形見やと也石やまことハ十九歳の時を子の
 昔命よ此命根應十餘歳とわとば一也年此
 らは必遷化形人と思ふと推察して正
 金房もなりくお所の中使法修しわらとる
 也形人



て聖光院へ入せりけり

日下き十二月叡山無動寺の大衆は小圃よりて
密の法候しと云い行法やとく人々を遊ばし
くば又室内とも見せられど正金房の寺なり取書に
只の寺にわりの夜をてふ小相戸は互りてと梅
枝寂す孤燈かすに挑て遠る西南の方にひ
結ぶは坐して合掌は顔よりて一公不礼小を子
若命の六句の偈又法唱て悲泣雨泣志あり主丹
誠の氣を全儀とも透徹とて一沖撃も哀れと後
かりたりわす僧心より密の沖見舞し

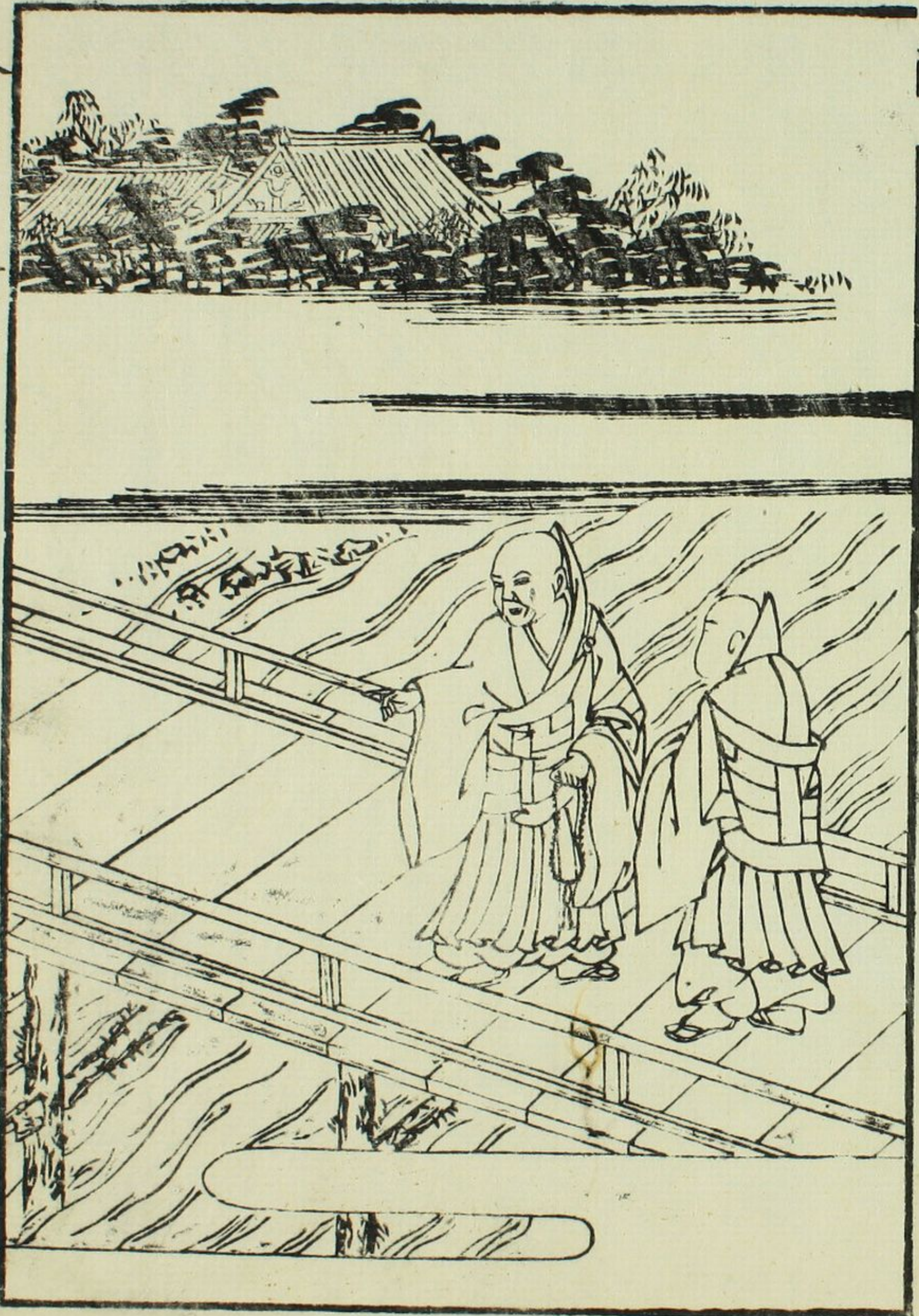
て本懐は神と宅したまうりか下山の時正金房
門外まで送て云うらあうと傍に六男よりあり
か付田の密の別の義よりち唯と年の中沖遷
化と只にたあふと又又らそあは是まで地
くはくもゆりーが今にせしとては
十九歳を子沖殿その靈若の事と又と夜
密ののわりの沖浦文の極まで妻く後りて至
痛哭しとぞ別とる然ども傍に只何とあ
巾をの乃とてゆより別りて七日を後
頭形りしが其前夜四更の比に及て室内小光



明のやき異香熏じて如之輪大悲の像現来
 しぬ善哉と汝が所願まじ小満足せんともあ
 飲もすとゆきすとそぎ若たまひる乾宴ハ飲
 喜の涙よむせぶてゆあしく大士の深恩沃感ト
 た多し是よりて明年正月より六角をく二百
 の日多紙思ひさらたまふま
 二十九日正月六日より八日未を聖光院に於て法
 華八講なむび小正親あ三昧冲執のり身師ハ
 慈園僧正結衣ハ叡山の耆宿達也是偏道
 世のいぬ乞く思に取形り

日月十日より山門の大乗院に遷り大慈願と後
 一京師六角の精舎如意輪觀自在をた二百員の
 慈多瓜をくして多統くもりくもけりまそ赤
 山越は毎日小正親と何なる風雨霜雪すもあそ
 修りたまふ事やうま精誠志すよりて二月十三日
 伊條の橋より斗ざるん安居後法下聖光院より遷
 する法下河とうもてくもるもなり信見え
 仰り何方一ゆせも入と乾宴もゆるり教示の
 親のまじハ底を抄るべは法下より法下より法下
 期えんのま今東山若水に法地房源空をす

まんまふ一天の心通四海の身神なりて其くあ
 許り給て要津と似たまゝ奉りけはま教化と
 うけし目しとある也とトさるる範要同たすし
 是なりん是神の教に絶びまゝく佛天の靈表取
 りて歡喜の添袖に申り明日原がて治すむ
 こととていふ別とて六角堂へま宿り其夜範も
 志すむらば申りて大乗院へも登
 山形

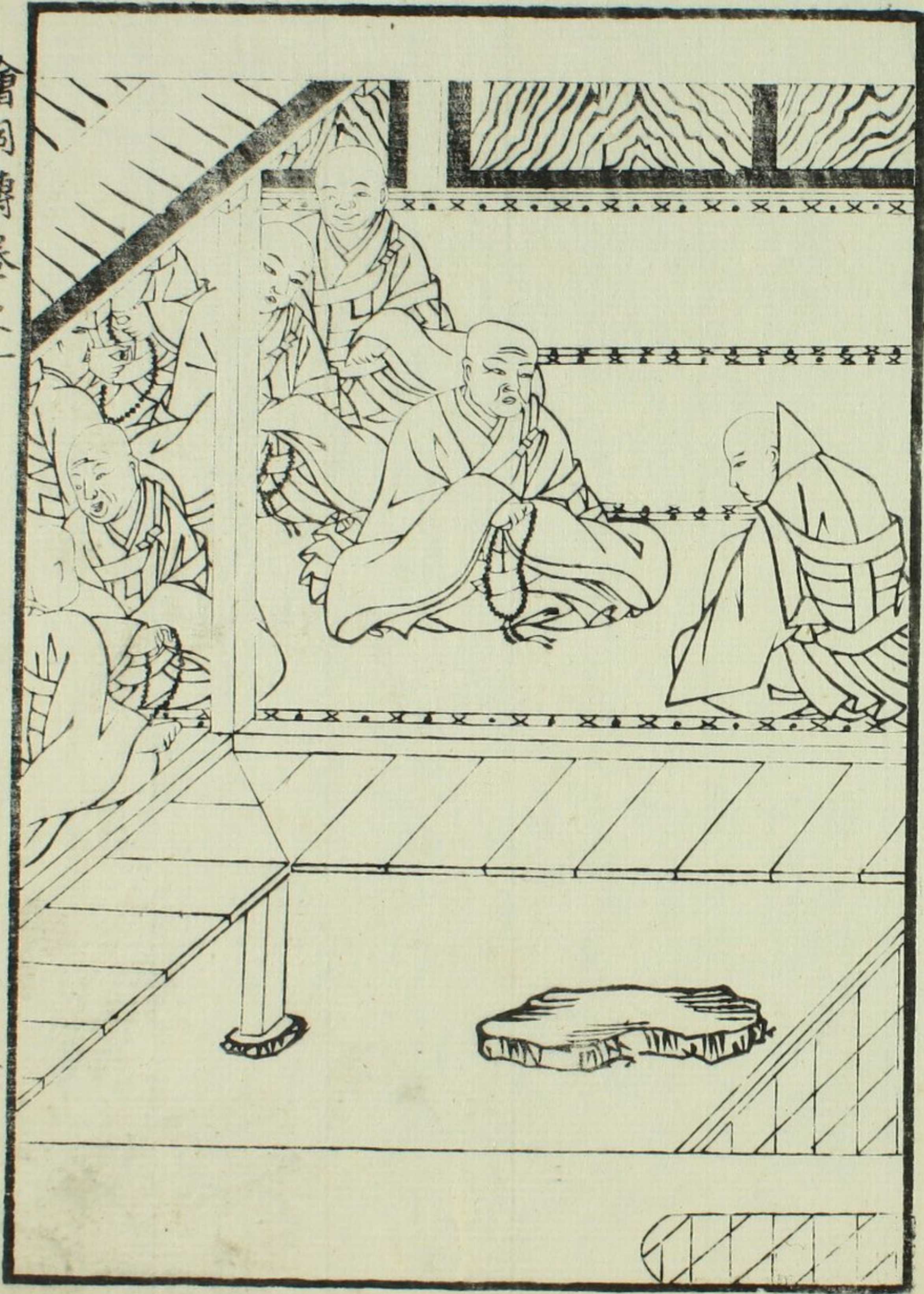


何れも成待りてを水よりひきたまふ 教天台
 の門跡 半もとる 法眼もや 与らる 沖波米
 わごやん 白法服を 沖車小なる 僧官供
 人教とて 供奉し けりきそ 車以 奏して 台
 水の 沖坊より ありあふ ちおし 空聖人 沖前
 雲深の 衣き なる人 十四五人 斗わりて 出離の要
 路 以 尋 ちりわり せぬ けて せ 美の なる 入
 少むり 道と 出 道 知 進 せ した みる 則 ち 深 空
 聖人 二 謁 見 せ たり け 師 の 言 徒 以 慕 心 難 の 要 津
 と 同 じ 人 なる 尋 ちり ぬ け け け 聖 人 吹 け

何れも成待りてを水よりひきたまふ 教天台
 の門跡 半もとる 法眼もや 与らる 沖波米
 わごやん 白法服を 沖車小なる 僧官供
 人教とて 供奉し けりきそ 車以 奏して 台
 水の 沖坊より ありあふ ちおし 空聖人 沖前
 雲深の 衣き なる人 十四五人 斗わりて 出離の要
 路 以 尋 ちりわり せぬ けて せ 美の なる 入
 少むり 道と 出 道 知 進 せ した みる 則 ち 深 空
 聖人 二 謁 見 せ たり け 師 の 言 徒 以 慕 心 難 の 要 津
 と 同 じ 人 なる 尋 ちり ぬ け け け 聖 人 吹 け

む日來の高懐るに満きて三境は化力掃蓮の
深方は文得し能くも凡夫直入のまは凡夫定
てとるまの沖舟子の教は加たはるまを永く自
力強弱の小流は捨て化力易行の大道小り一向
専念の行者を成るひる心名は改めたるける
なりと清まわりるまは空受入り練空と後入
る中が門人多き中よまはるる自力の執法は捨て
まはる化力門は破し逐は降るのまはつは指ぐま意
探ゆる道練禪師の修風はまはるまはと仰る
ま下の一字はまはるる現師の沖練はまはるま

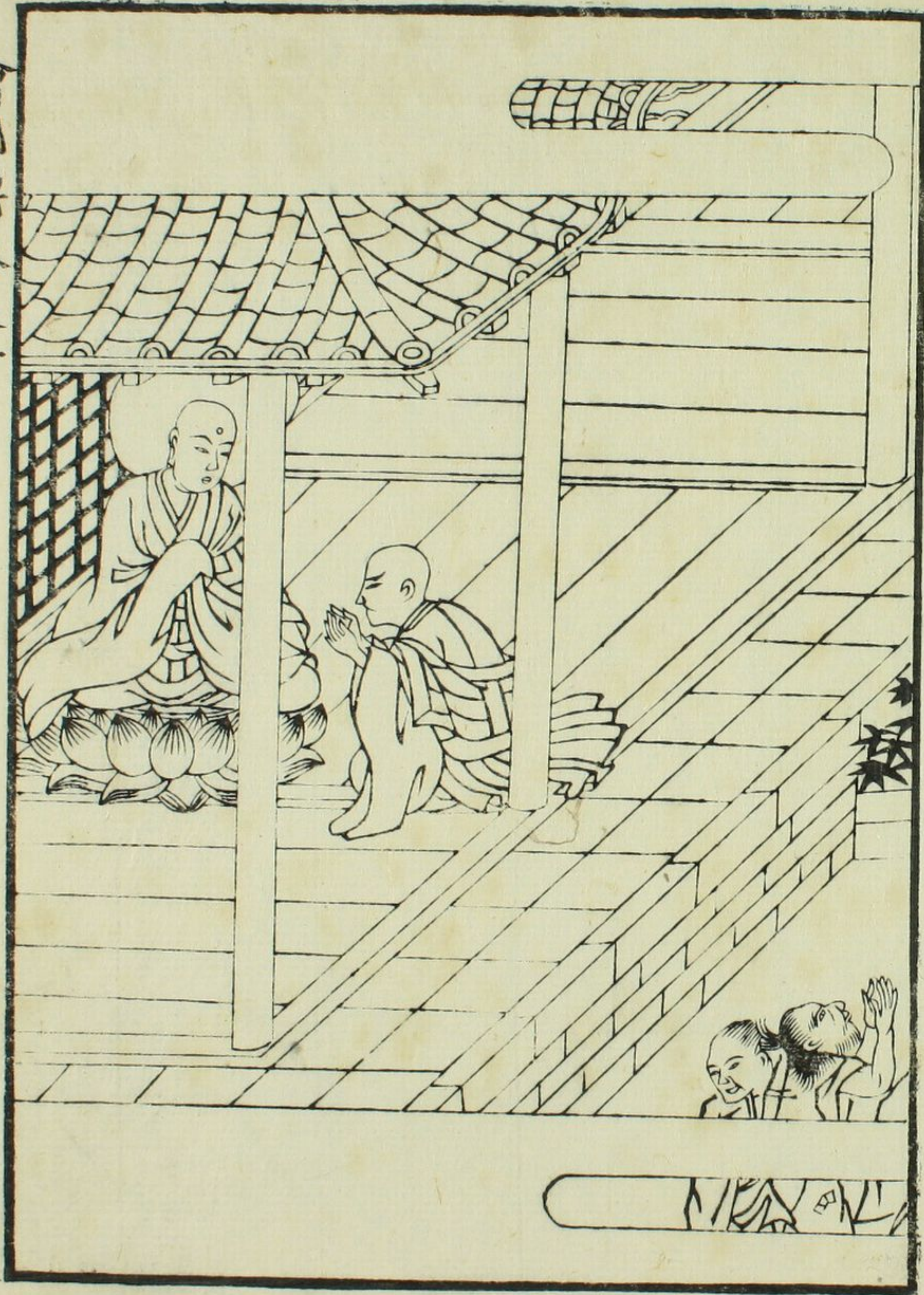
ゆがまのなる練室今一夜一練を安きあり
門跡の天版何れせむ法衣はまはるま供奉の
人まも沖暇はまはるままはるままはるま
光院一ゆりたる良哉昨日とて天台を門主とて
綿の褥はまはるま豊う諸人拜趨の膝は屈せ
まはるま孤獨の業門は成なるまはるま麻の衣は
はるまはるま系の席は沖る法衣結をせり法衣無
際のはわりまはるま類もたはるまはるまはるま
のまはるまはるま是はるまはるまはるまはるま
まはるまはるまはるまはるまはるまはるま



既ニ宿願成じりて世に遁じて室師の門に入
入るも六角堂百日の無誓願も後ぞ其相
續せぬ毎日常詣の歩成りもびあふれ
四月廿日の夜寅刻に海に沈みあま差の中
に救世大菩薩教容端改の傍形と示現し
白納の御加賀袋に服着せし廣大の白蓮
花を以て御ひて普くのことなり

行者宿報設女犯 我成玉女身被犯
一生之間能莊嚴 臨終引奪生極樂

この文は通し終りて云くは又ハ日か誓願也
汝れ又のうたふと一切群生に説くもむす
く爾時夏中おわりおぼし御堂の正面にて
東方に貝多の城を築くを山より見る
山に教千万億の有情群集より普く命の
うくに世に説くもむすくは教千万億の有情
もむすく説くもむすくは又ハ日か誓願也
またいぬもむすくもむすくは又ハ日か誓願也
と云

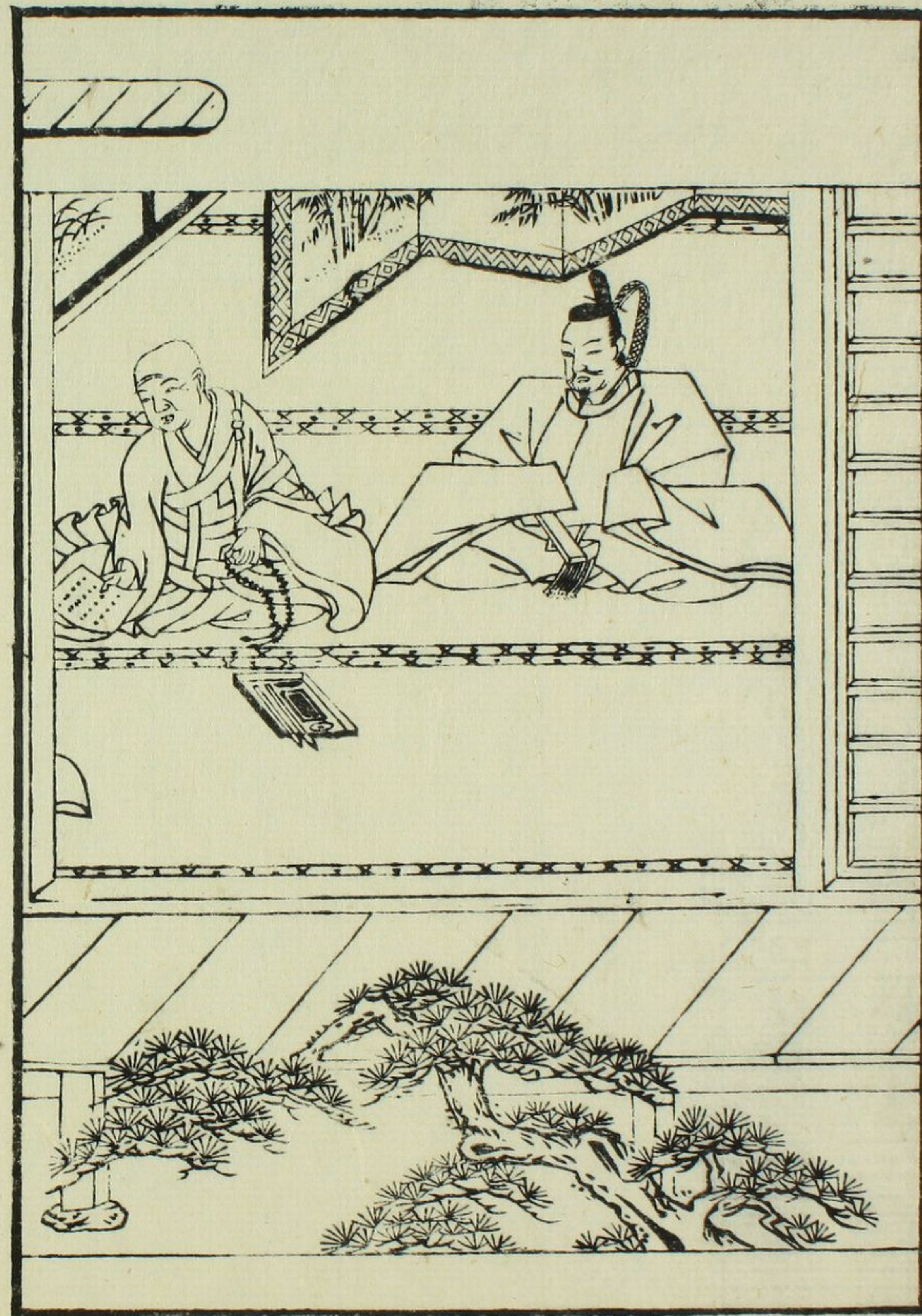
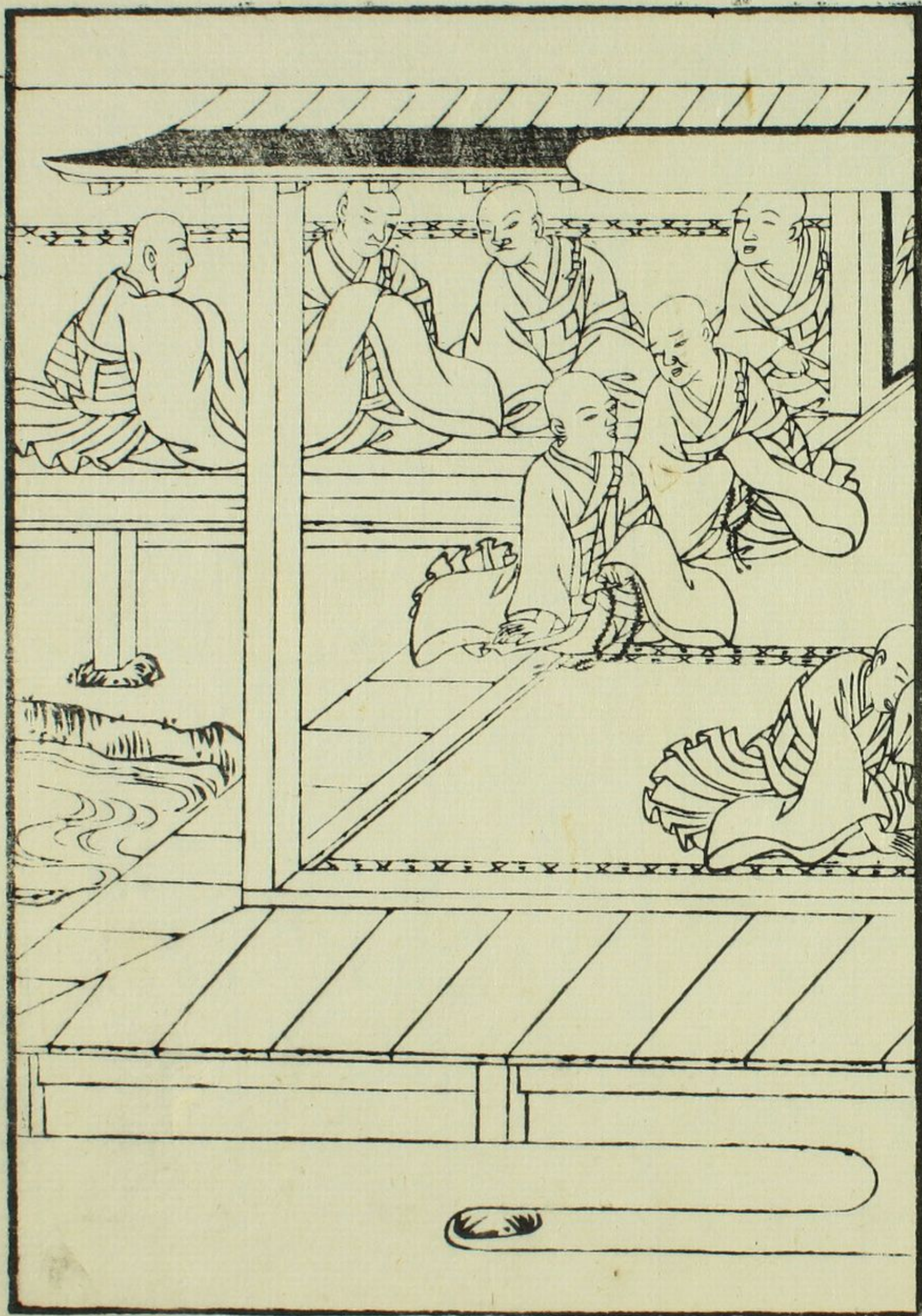


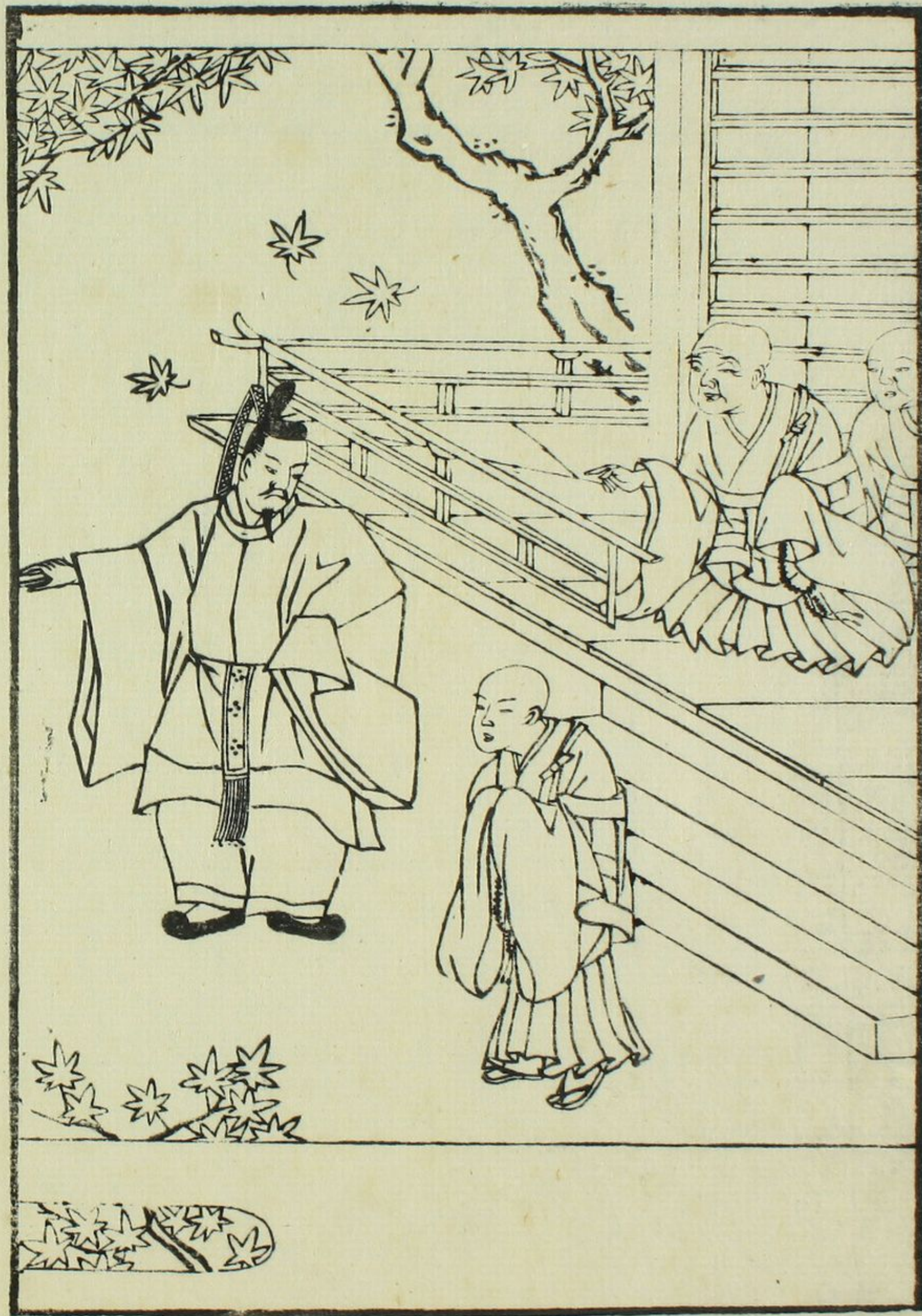
おろしき奉十月と旬月輪敷下兼定公台水の
禪坊よりうたまひてりりもるぬやん沖法談
ましく心殿下修して日沖門東にまこの中
多く入降の智徳の僧侶形小兼實の在家なり
聖の意傳と在家五津の意佛とふかりめやいぎと聖
人若てのたまうとれい聖道自力門の志かり他力津
古門の越の十方居士と誓ひてお家在家の福か
く一切長悪凡夫得生く釋して持戒無戒の撰も
形一努く所疑あるべと云く殿下又宜く此は所才
子の中は未不犯乃法信と二人賜て妻帯とさし

在家性生の龜燈よりゆんとせめるく聖人聊も痛と
まらば子細にまら練空とらり殿下の仰は後ひや
るる道一のあたすの練空のひひる事なまは
只此ときむくはやくはと練ともはるやあ深よ
くまて居たすひくは良わりをたすく日れ父母
普櫻の家は意園和尚の室より入より釋門の
負よ成ぬ又天台の門室は道きて今一向の東門と
成よ師の知石取也此に教百人の御弟子の
中よ正知の撰きて今の仰と兼るの佛も我
は於りより面自りくはくはくは墨條の社は不

於中より人々あつて雷人宜く主歎死つていふ是下
河坊のさし夏之初に救世菩薩の靈を以て
まゝに此や深空をりて此とよくあまり今の眼
の親をたむくし世にたすむるれうの禪退
わふごのいふて現をよせかの四句の若くは自
事起ししと招かしたまふ一字一息も遠ざりて
べ緯空大よぶらきあひの事この河中子達も皆
一日は驚嘆しそわし緯空河房のいふ佛
菩薩の化通りやとさやぬ人もありたり現師
の指揮なりけり聖是位空の人とも法にいふ初め

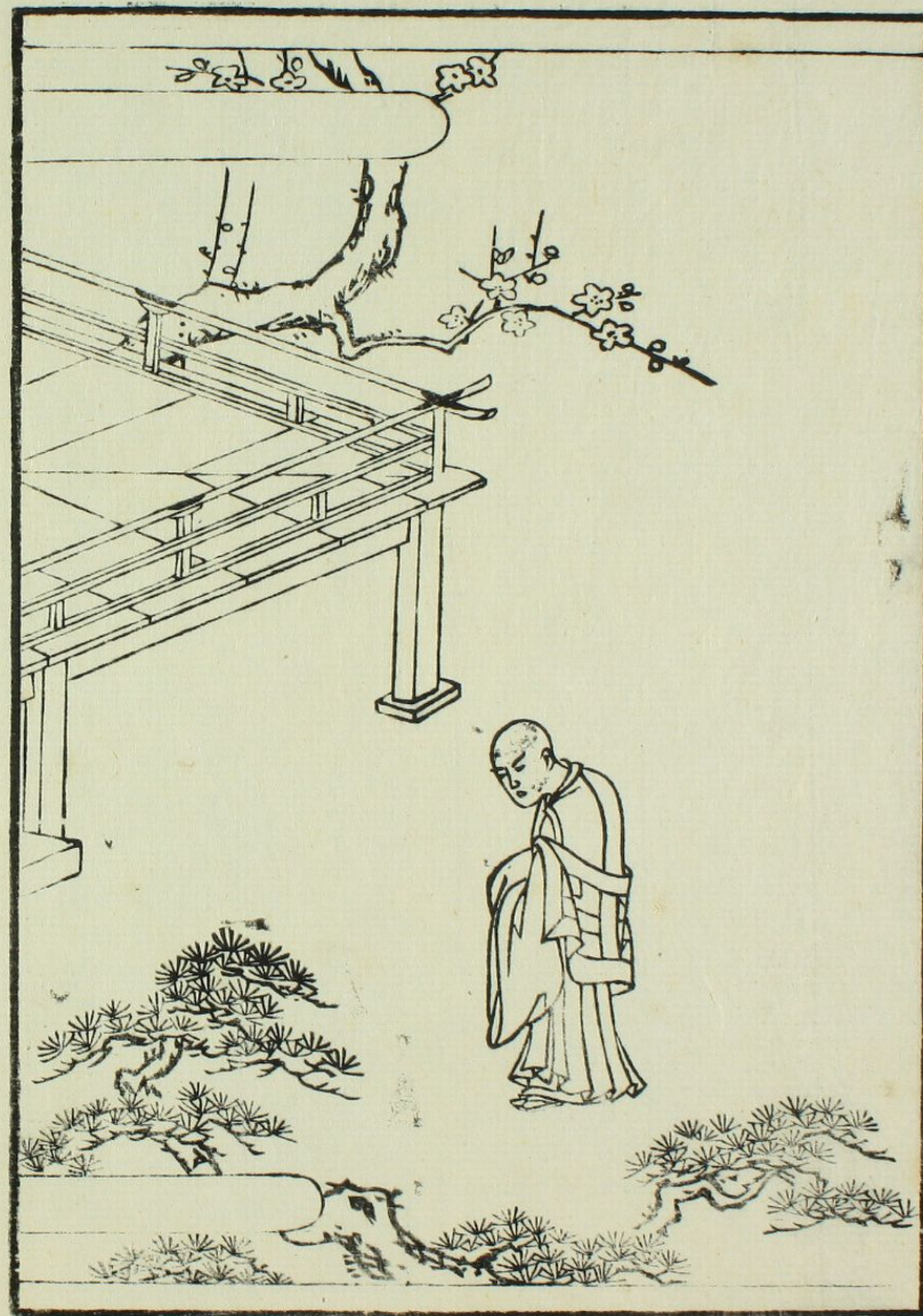
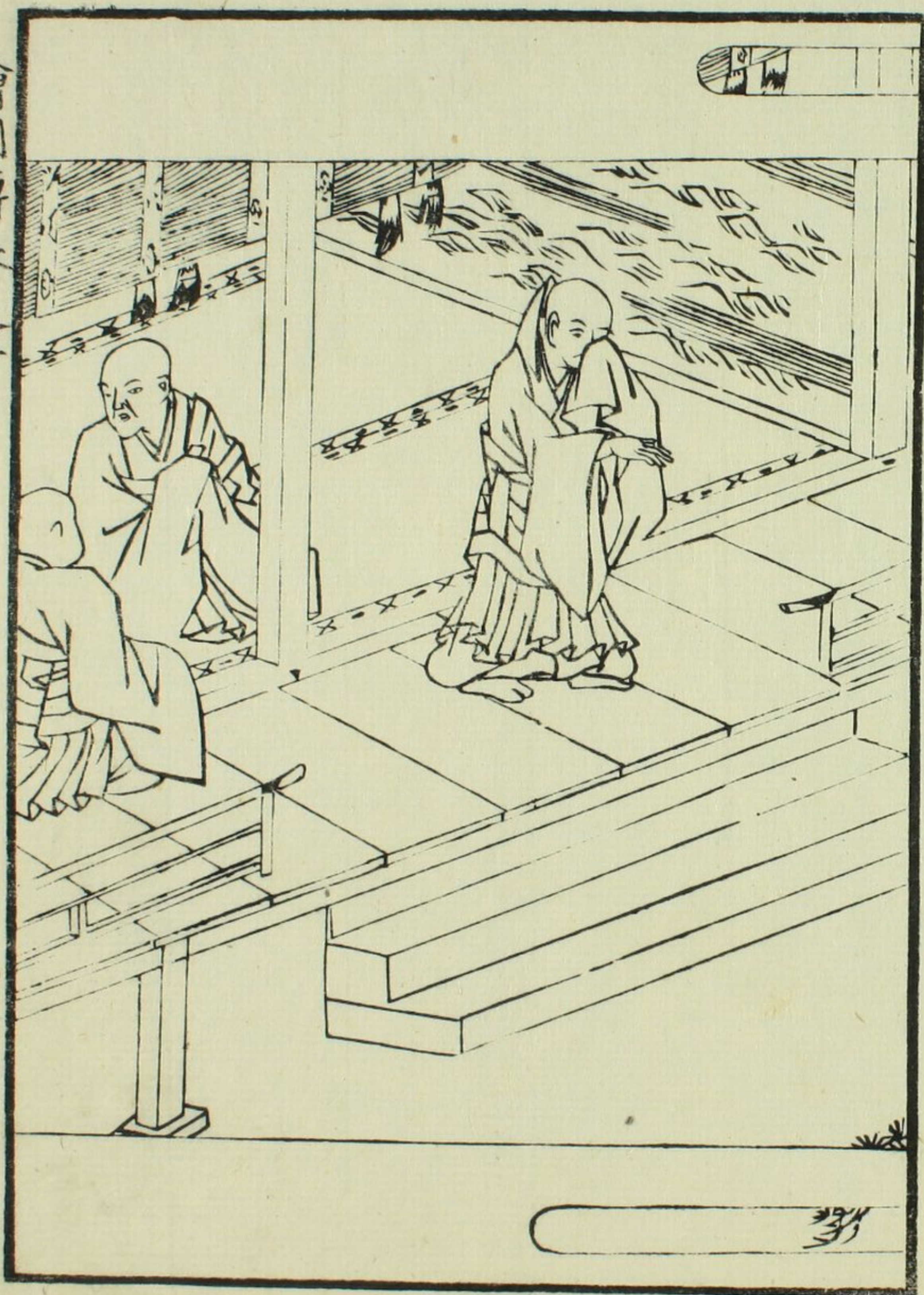
あは下もたは海ぬをて同車とて還河一かひ五
條の河尻の河所は接しいとわらこく十八歳に成
あは玉日姫とて息女を配嫁しとて死さともまこ
おのい思儀の河底空もまき浦をりけりくまは紙
あは月輪教下は九丈性生の二尺は変定せんが
あは紅園蓮妻の賢娘は度門して貧道黒衣の早
婦とて大時中入へ跡色起世の利物は弘通せんが
あは相乗とて是のち牙はあつて在家性生乃
あは蓮は備あつて竊まこをと接する一人は是等至菩薩の
應供を一人何れも東人にははは高方度とて下





のころ年の正月十七日青蓮院にお入りて事
 乃きよの慈園にお高一目沙汰して涙よるを
 之のも宣つた緯室も指す心むきて涙泣く
 之も入階ありてわ者のたすりて孝同とい
 公倭寺の養ふらひ北岳の龍家我山の實
 とくは流るるよの涙のらきぬく東門と
 して見むしそ悲しき事よふのよとく本離
 各役の道よ入るよ事悲の中の悦也と
 沖機嫌とるるりるるたり緯室も去る年
 禁裏わ寺の沖使の事より始て知底は

の事なく門をさるる一あるを僧心の許よ
 涙るるるるる

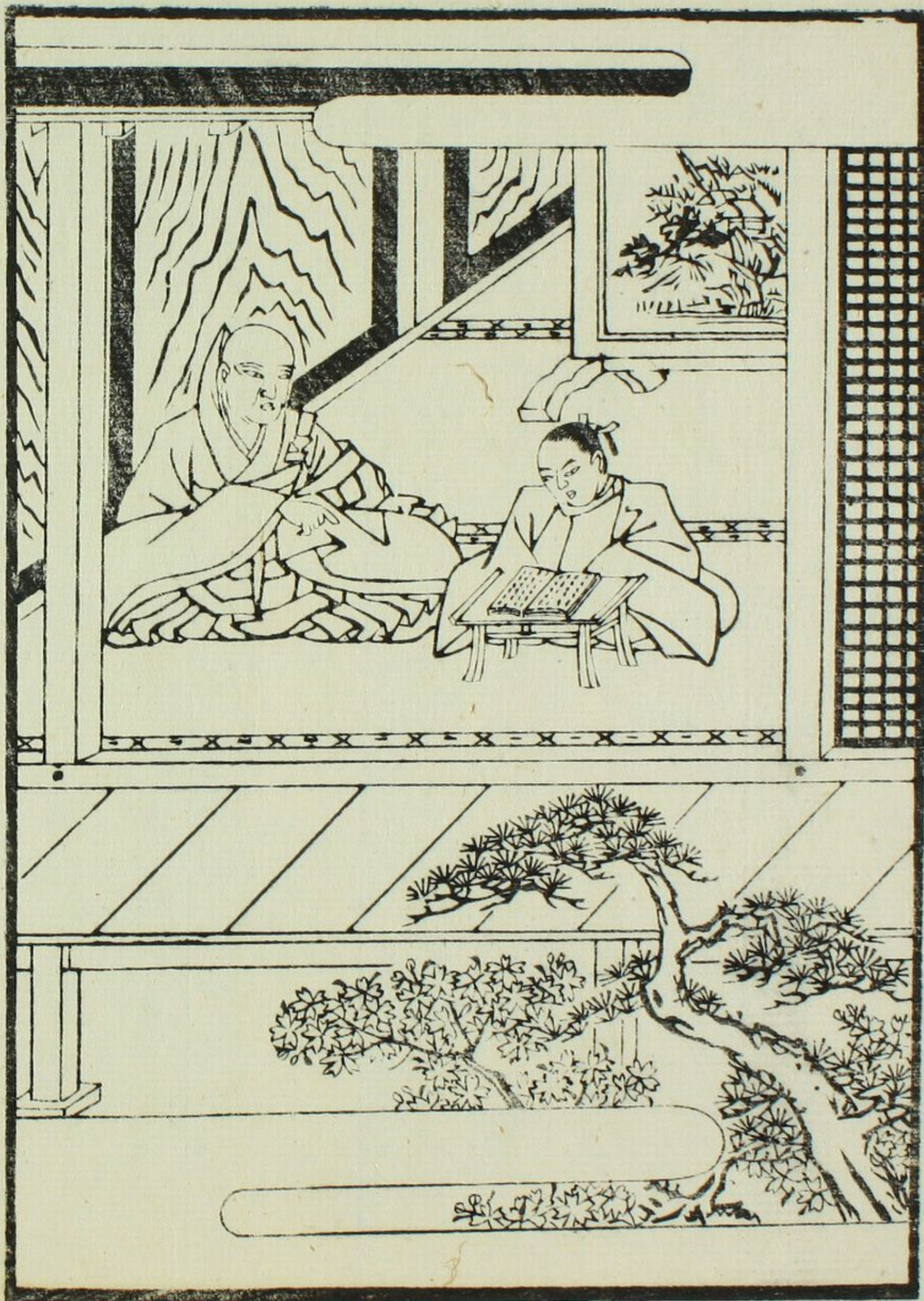


我々より又聖光院へ所入りて僧官候人等座
より初よりして深位の聲志がらなまらん又即
日登山すし無動寺の大乗院へ入たる一寺
の僧徒等奉りて秋の悲哀の聲ももぐらん
厚る方形も夜の大乗院へ所一宿也四日三塔
巡拜しあつたに根本中堂山王鳥よかいて終
る後よ水多浦わりの日のをせりては是所の
所坊までうへてなまらん

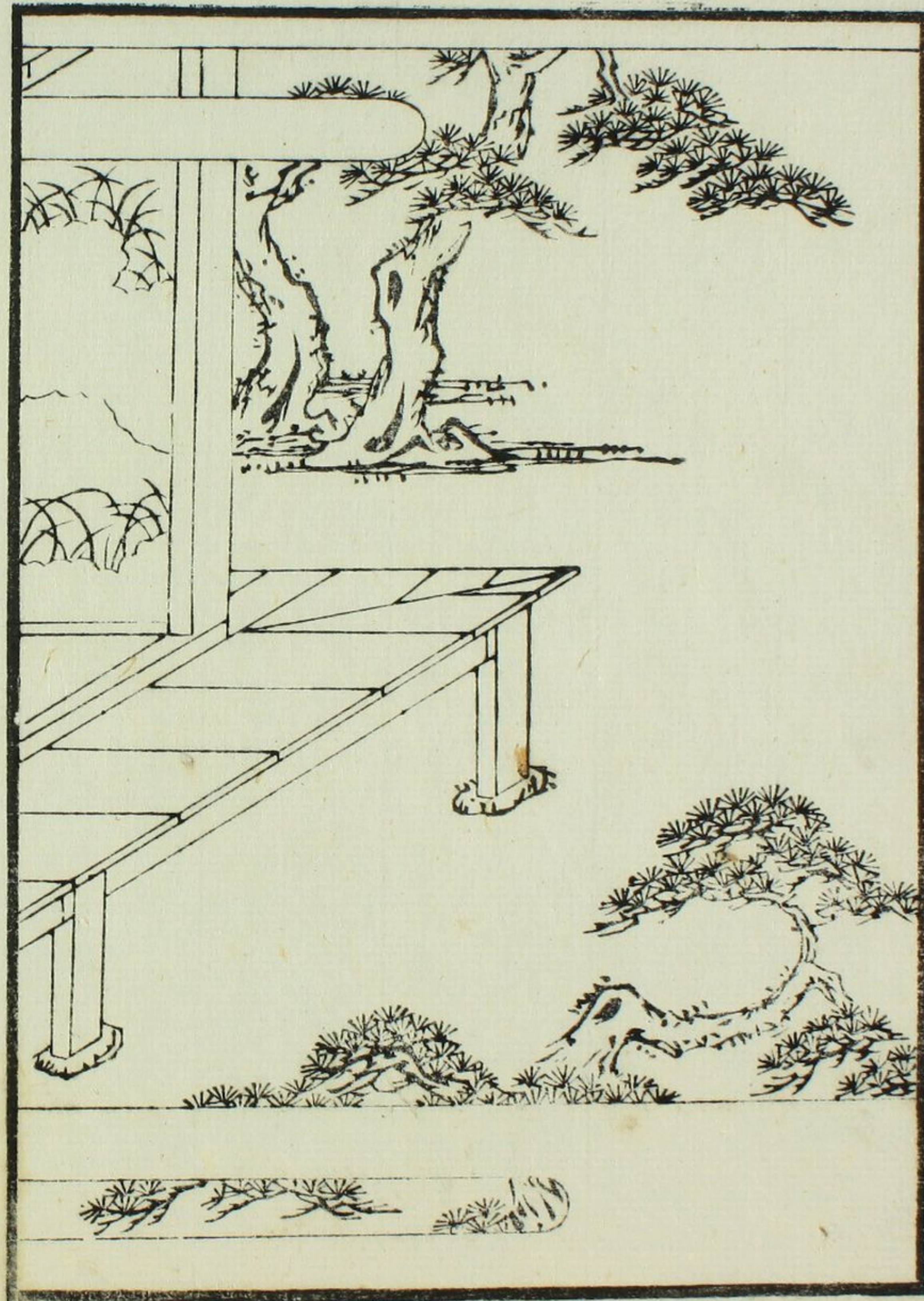
おのりき年二月播州難波四天王寺に所多院
河原又河州磯長野徳太子の所廟よ三夜三夜
所坊までうへてなまらん

由緒よのせりて法隆寺よ所系詣りて足運僧坊の許
よ今寄寓しあつた夜多しは所坊河原有田日由系
よより所坊もあつた行も所坊までよ下はつる又四月五日
六角堂よ系詣りあつた所通夜わり天明すて多浦礼
拜して感涙よ沈りて是等いよ去年去今の廣大の
悲涙報りたまらんてせ聞えり

日き年十月十日男子誕生す由ち屠丸と名けけ
るより後よ乾意し号は八歳の三月十六日より慈園
尚乃許よ所より所系子よかつた成長の後印候
と改名りて天台院学たすらん後よ隱道しあつた



達仁三年正月十八日あり二日之夜異時の家室に於
 て不断念佛の列時法悦せり身師の十八日の源空
 聖人十九日の慈園大僧正廿日の聖賢法市也
 徳庵の聖賢法印聖信房徳空法蓮房仁
 空勢觀房源智念佛房舍阿禪勝房造河法
 力房蓮生授智房性範正全房侍從聖人俤
 空二十人なり源空聖人と慈園信正と法
 合せて十二人とす



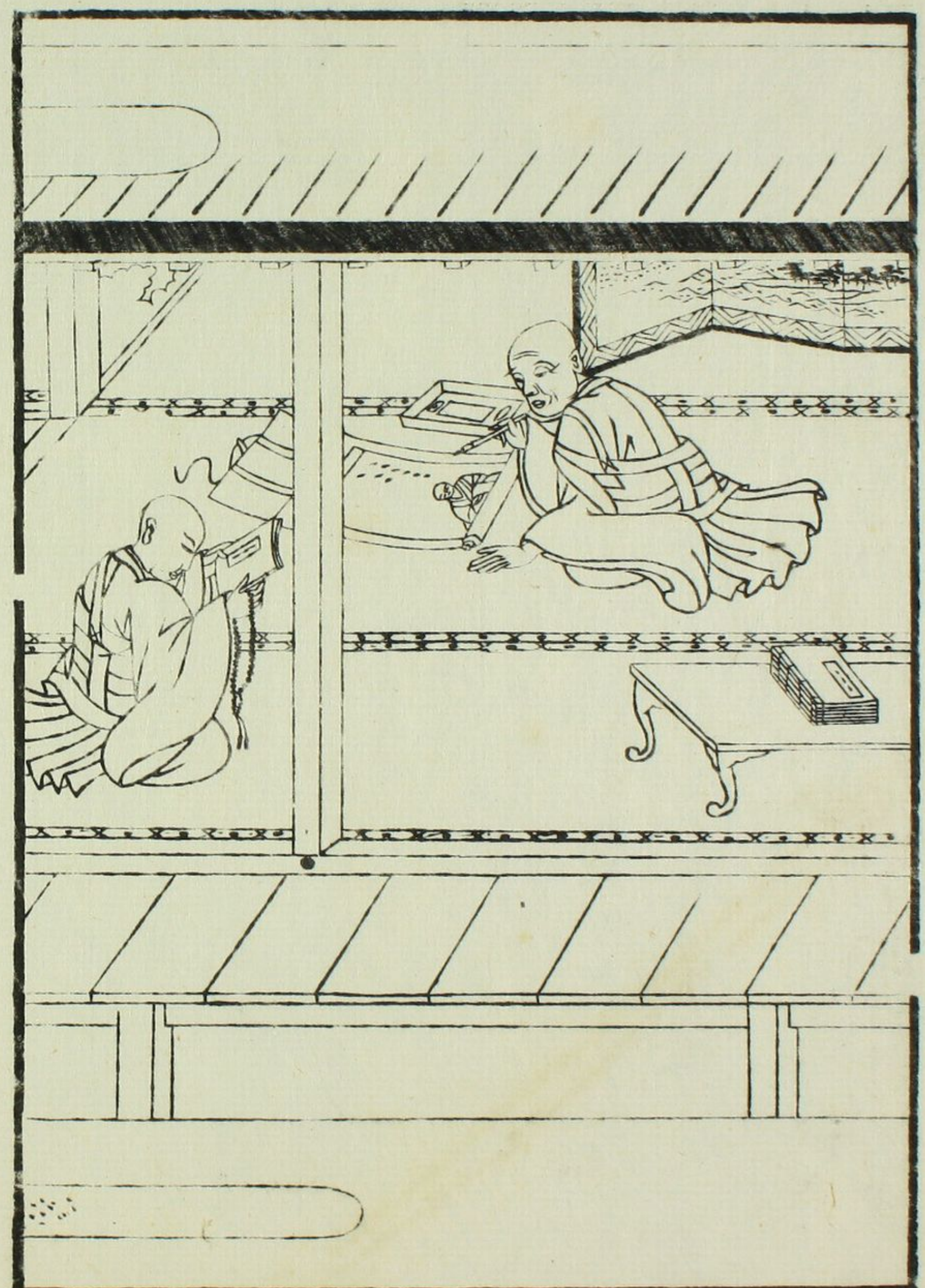
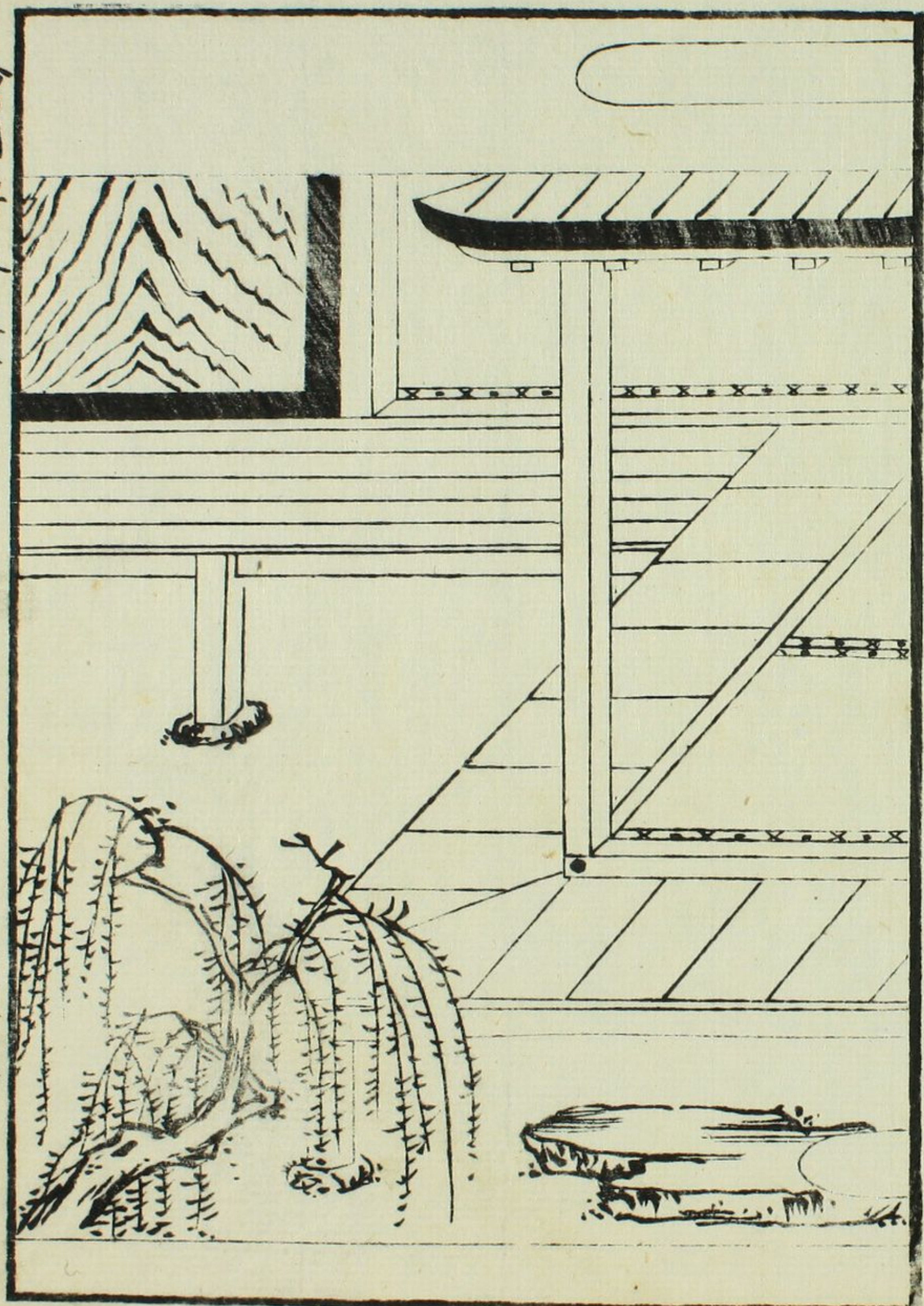
何れも年の三月より空野人の名代として長惠房
と緯室とくかろるるが教下の所評（法讀よむ）た
まよりき相承の安んよ聊も相遠形さ事よれんも
ても初ぬる

又久二乙丑兼生十百の著る小緯室記より表水
の冲庵室と糸あよおろし沖右人形（空野人
のたまり）そと所房の他力の法門に於て最上之法
形り我又撰集の秘書あり今これと授巻し早く
寫りて勢に他とてうべともかつらそよ以て
らる所謂選擇奉願を撰集ありき緯室歎を才よ

何れも頂戴するまして國術の庵と退き兼香札
拜してに以書字の他一密約の旨何れも
内題と次の二行の鬮紙と垂て第一章の標目
より書給めなすり月中旬より功早とよから指系
何れも後よ其ふよは室野人兼法澤と其内
題の字と並ぶ南无阿弥陀佛生之業念佛為奉
と釋緯室と二十有符の文字は書加て手記とこれと
授與せしむる又あき日室野人の壽教と写し
何れも奉氏願ありた右形許したまひは
収てこよは図畫しあひきま後国七月廿九日室

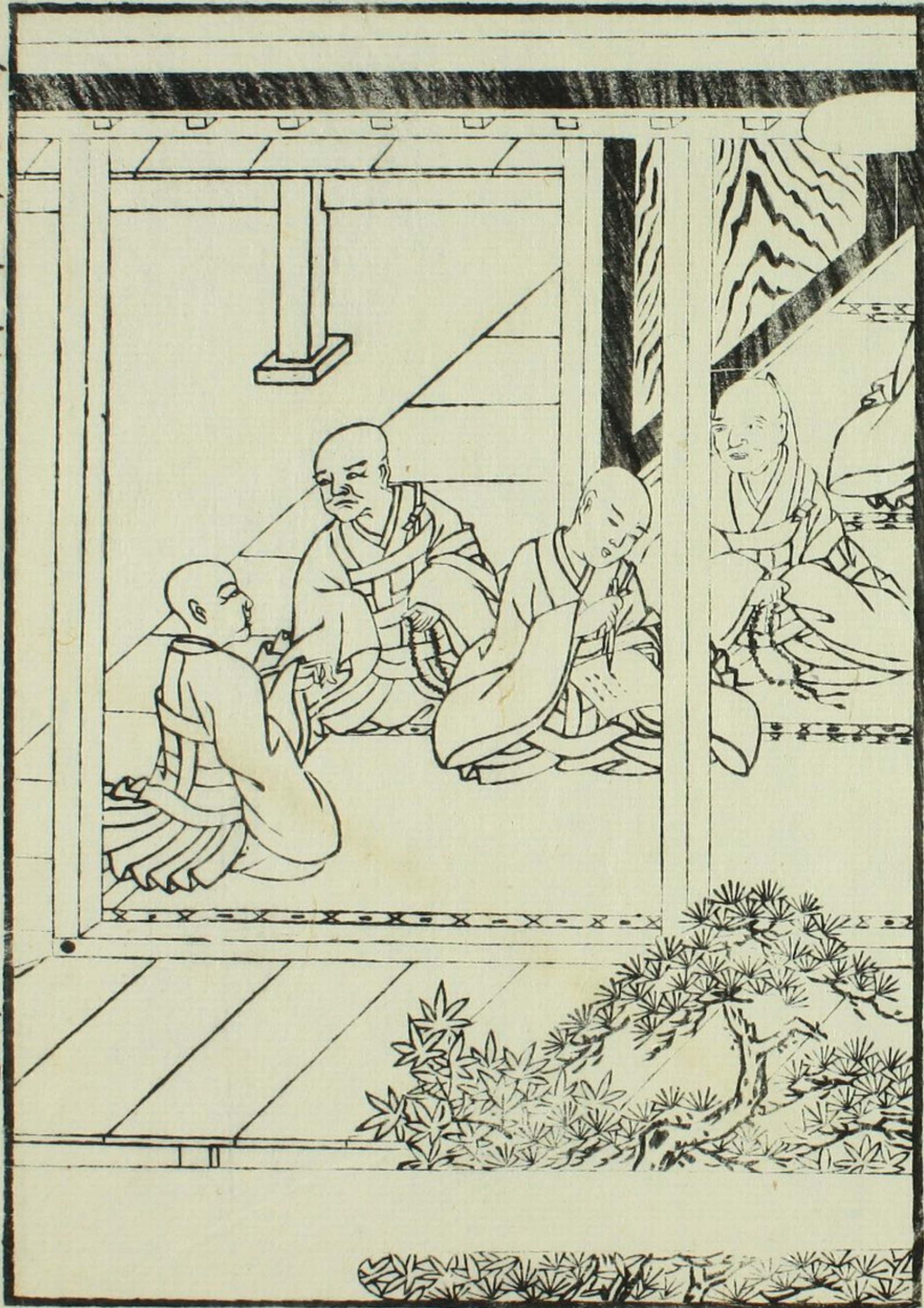
聖人より其筆法を以て宗義相承の印状とすけ
らるるの時律堂の名を改て吾位房とすきあり是
ハ先年十九歳の時に聖徳太子の遺勅を讀み
事成ると初く聖人信ありてなり又師資相承
の流傳の乃に其法を以て其教を聖人沖自筆
して南无阿弥陀佛若我成佛十方众生称我名号
下至十聲若不生者不取正觉彼佛今現在世成
佛當知本誓重願不虛生称名必得往生の五十
四字の讚法紙書てありありかの印状乃中念佛
流傳のをもりて終これと進んといはるる是なり

そもく社選擇本願念佛集より六月輪開白
兼實公の教命よりて選集すありあり其宗の
肝要念佛の真義を以て採りて其の諭やす
一誠より希有の華文無上甚深の宝
典なり法華法日蓮の海と其の人千万といはる
云親云疎の見る見るの徒息のみなり
既又製作と書寫し其形と圖画は是專念
正業の徳也これ定住生の志なり也
表乃流しむせびありありとせ



おふじき年九月五日吾信房空上人より
なすりく教多の御弟子達御書も一師の教と
うけて日く往生不退と期す所也此と報
去得生の安心す一形りやまこと矣なりや
面々の教をて試す一定又改悔せしむ生あ
朋友の睦もかり者来同生をいふるに
ねよる事つる危うく聖人宜く戒め
これが意ふ叶なり明り人々集會の御書の
方におる危く信不退の疾分
て人の意をて試すなり空上人と中央

のふたふましく事法圓石吾信房を
執筆しそかこまに疾く是時大僧
却法不聖足法蓮房住定熊谷の蓮生亦
の信乃疾くはるまじり其餘の人々の互に在
と顧ては疾く驚りしうば吾信房自ら疾志
りて人の疾に急なすまなすも人々を
のり大師聖人いふや源空も信乃疾小列
疾くと意ひりまは吾音の人々感の恥感の
後悔の色疾會りるもつりしとをり

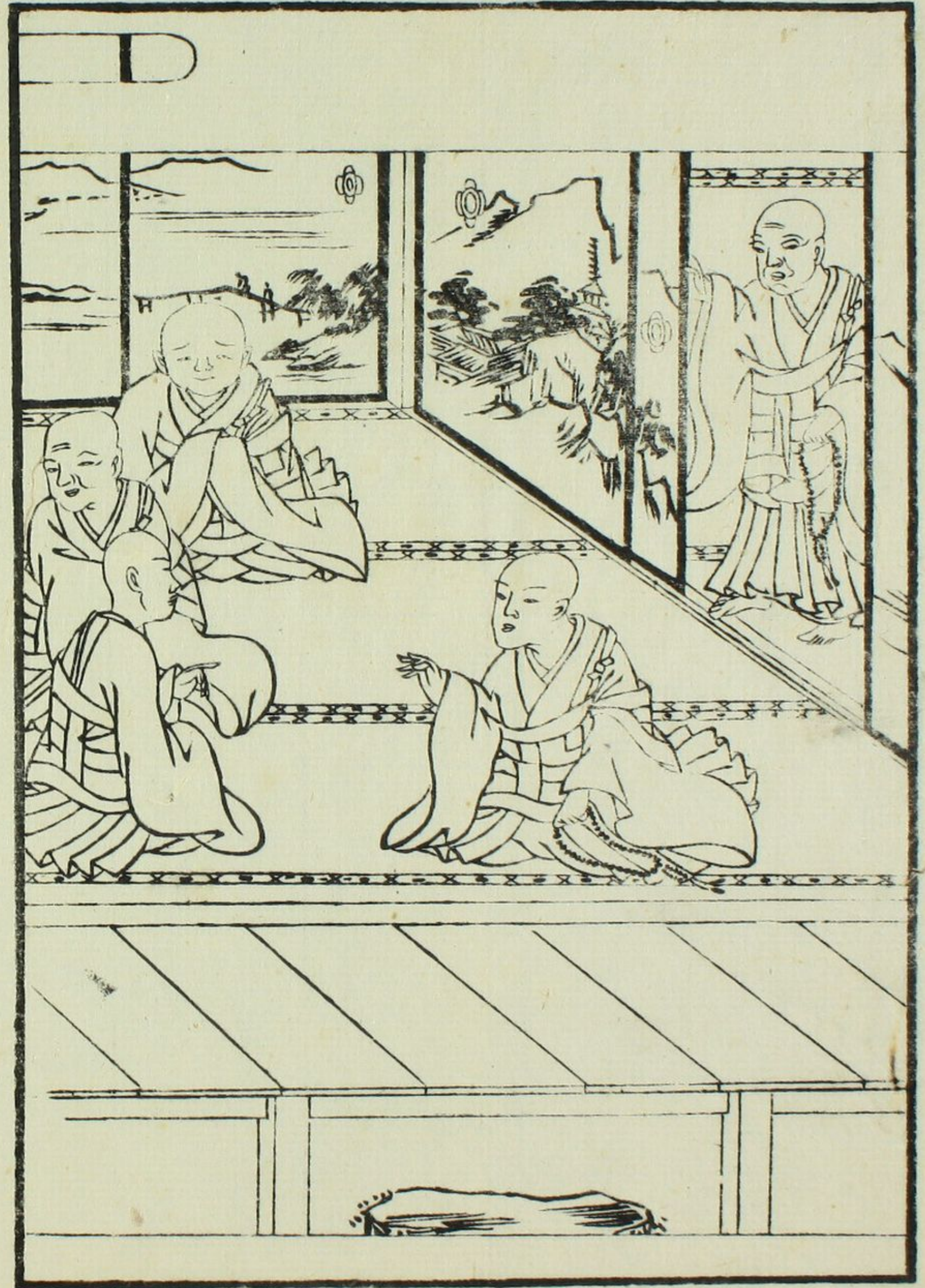
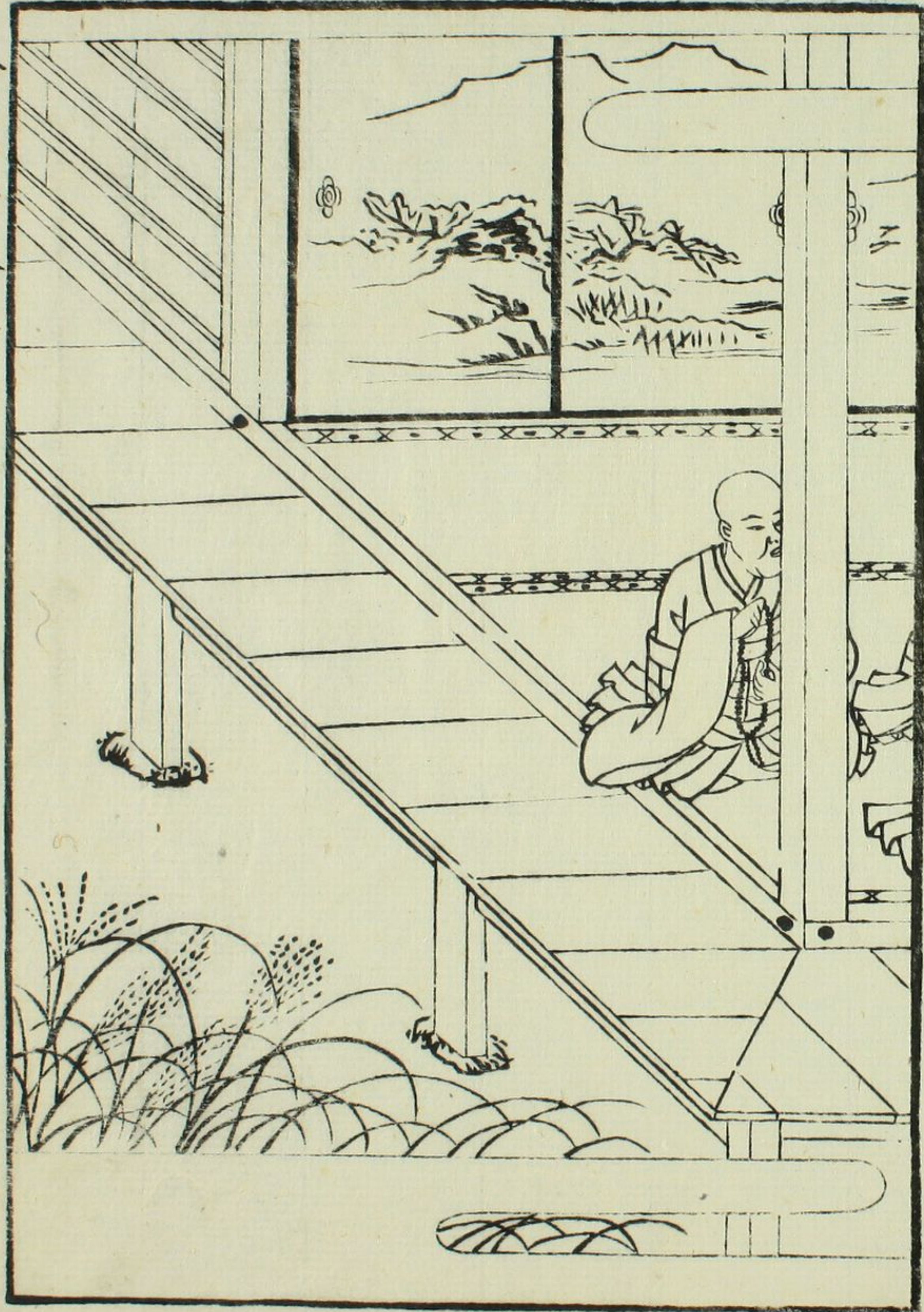


せきと六字の嘉号ハ万善園備乃妙行ナリ
テ十方三世徳号の本ありがれよ末法五濁
の衆生お離生死の方法性生淨土の大利
たゞの一行あり故よ元祖聖人專ラ性生之
業念佛爲本ト勅進一ノば人々々々ハ
称の名号ハ業縁トモトモ一變定一
テ深ク願力の不思儀ハ信ぜざるハ機功と
ムガむ自力の念佛そ其の報亡の性生
ハ遂グ一ノ故又流祀聖人も信ハ何リ一も名
号ハ一ノ故一ハ詮クハ又一向ヨ名号ト

少あり一も信ハ何リ一ハ性生トモトモ
一も念佛性生トモトモ信ハ何リ一も名号
一も一ノ故一ハ詮クハ又一向ヨ名号ト
テ有グ一ハ何リ一ハ性生トモトモ
性生の勝益退失セざる事ハたゞ他力真
實の信心一何リ故よ其性生トモトモ
信ハ何リ一ハ性生トモトモ

建永元丙寅年八月十六日在永水より人に聖良房
 湛空執親房源有念佛房志阿多と云より
 集りたすに物信の序より念佛房の云はく淨と云
 然に在に性生取取と云い下も凡夫の信心の誠す如
 し前より聖人の如かり信氏得く慮形く性生と遂
 危き事と云くこれと云く一産の人と云ふは同意よりと
 是より三府若信房等より肯たすらばやと云自
 然と云ふ思ひゆるば聖人の淨信なるの信信が信心
 もかゝる所ありと云く思ふ也と云くされの人と云ふは
 若信房の如く是形いそ聖人の淨信なる及る事と云

若信房若くは云沖智惠宗同に云く思ふ事と云
 し其起る事と云ふは佛力の信なるに於て一と云其
 こゝより取取りしより今も此の信なり聖人の淨信
 なる佛より賜ふせあり若信が信心も如來より賜り
 ぬ何系なるもの有りとも互にわたりし心ざり
 ぶ聖人仰きてて宜く自力の信より其智惠よ
 施ひく清涼のよりあり佛と佛力の信より佛の
 方より賜ふたすに信ありと云ば我も人も皆てを賜ふ
 ありの形なりと云くこれ信えらるべし信心の習わひて
 おし海心人の口が言ふ淨なるも其の如く信は事と云



親鸞聖人繪詞傳卷一終

